求道

第拾壹巻

第八號

求道第拾壹巻第八號目次

求道

◎從順と信順

講話

◎『教行信證』信巻（菩提心釋より）　近角常観

第六席　願成就釋

一、『一念多念證文』に曰く、　二、能の言は他力を表はす　三、其佛本願力　四、聞不具足　五、聖光上人、法然聖人に面謁の時のこと　六、聖人が求道の態度　七、法師には三つの辭あり　八、名聞、利養、勝他　九、唯念佛と雑行雑修　一〇、親鸞聖人の頂かれたは　一一、一心専念専心専念

告白

◎ほとけ様御一人きり　小澤はる

◎財布の底迄叩いて下さるお恵み　渡邊秀吉

講義

◎歎異鈔　第十三章（承前）　近角常観

雜録

◎唯観念佛衆生攝取不捨

時報

◎求道講話概況

講話

毎日曜午前九時　求道學舍（本郷區森川町一番地）

毎土曜午後二時　第二求道會（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後七時　第三求道會（日本橋蠣殻町説教所）

求道　第十一巻　第八號

從順と信順

○一日私の三人の子供が何れも少しく病氣をして、一人は粥を食し、一人はオモユを食し、一人は輕き菓子を食することになりてありたが、或朝三人ともに之を嫌ひて大に泣き號びて居た、オモユを與へられたるものは粥を羨み、粥を與へられたるものは通常の飯を羨み、輕き菓子を與へられたるものは甘き菓子を好みて、何れも箸をとらず、菓子をほり出してすねて居る。

○私は佛間に御禮を上げて居るに益々三人の子供が頻りに泣きて大騒ぎてある、アヽ親の心子知らずぢやなと考へたときフト思ひ出した。

○高野の明遍僧都が選擇集を披覧せられたとき、此書の趣、聊か偏執なるところありけりとおもひて寢られたる夜の夢に、天王寺の西門に病者數もしらず惱み臥せるを、一人の聖、鉢に粥をいれて、匙をもちて病人の口ことに入れて居られた、誰人かと問ふたれば傍の人が法然上人なりといふと見て夢がさめた。

○僧都覺めて大に懺悔せられた、アヽ法然房の選擇集を偏執の文なりと思ひたるゆゑに戒められたのである。イカにも法然上人の專修念佛は粥であるオモユである、病人も初めは蜜柑、橘、梨、柿などを食すれども、夫も喉を通らぬ樣になれば僅かにオモユをもて濕して命を與へるのである、五濁惡世の我等、實に病人である、重病人である、戒律修行の堅き食事も出來ず、天台眞言の菓實も食ふことは叶はぬのである、此の如き重病人のために態々作りて下された御粥が南無阿彌陀佛である、オモユが念佛三昧であると、忽に顯密の諸行をさしおきて專修念佛の門に入りて空阿彌陀佛と名づけられ

○アヽ如何に貴い夢であるか、マタ如何にも貴き入信であるか、實に南無阿彌陀佛は佛教の眞髓を粥にして我等に與へて下されたのである、堅きものや甘いものが喰へるならば親が粥を作る必要はない、小供はマヅイといふて箸をとらぬが、夫々病氣に應じて態々作りて與れた親心のありたけが粥である、オモユである、實に選擇本願である、選擇願心である、即

是其行といふは選擇本願是也、親鸞聖人がイツモ法然上人の念佛をば直に選擇本願と宣ふのは、此親心をいたゞけとの事である。

○トコロが肝要なのは此親の心、子知らずて、ほり出して外のものを羨み好むのは、畢竟親の心を知らぬからである、併しよしんば親の言に從てハイと之を喰べたところが、若し親心が知れなんだなれば、矢張中心滿足せずして堅き飯をたべたい、甘い菓子ほしいといふ心は止まぬてあらう、是が即從順である、服從である、俗に所謂、いふこときいてある、いふこときゝといふことは面從はすれども心服はせないのである。

○是實に律法主義の戒むべき點である、從順の態度の頗る注意せねばならぬ點である、法然上人の御弟子三百八十餘人誰か一人として上人の命に背くものがあらう、何れもハイ〳〵と從順なる態度をもて念佛せられた、粥をたべられた、オモユを呑まれた、併し是れ本願の行なるがゆゑに、親の命令ぢやから、是非喰はねばならぬといふ立場てある、善導大師散善義の順彼佛願故の順の字を從順、服從、戒法、方法といふ意味にとりて仕舞ふたことになるのである。

○實に是れ間髮を容れぬ左右の分水嶺てある、如何に從順に仕て居ても、矢張心に自分の病氣を自覺しないと、忽に他の食物もて補ひとして喰べてもよいぢやないかといふて諸行往生の立場に立かへりて仕舞ふ、たとひ病氣で喰べられないと知りながら、色々賢善精進の相を票せんとするは、雜行雜修の間食をせんとするものにして、畢竟親の親切の親心に腹ふくれぬからてある、タトヒ粥、オモユを食しても親が子供の病氣のためにとて、態々作りて吳れた親の深き心をいたゞかぬ間は中心の滿足がないのてある、中心の滿足がないあひだは矢張物足らぬのてある。

○オモユは實に病ある子の爲に親の涙の集りてある、粥は子の病氣を醫せんとする親の心血の塊てある、ナルホド味のなきといふは尤てある、サレド汝の病のためには親は眠らぬのてある親は食はぬのてある、汝が粥食ふ間は親も粥を食ふのてある、食事に味がないのてある、汝の腸や胃が健康てあるなれば、何を苦しんで粥を作りオモユを煮るべき、煩惱具足の我等は何れの行にても生死をはなるゝことあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意ひとへに惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の

正因なり、此親心を御說き下されたが選擇本願てある、本爲凡夫の仰てある。

○此選擇願心をいたゞかれたのが親鸞聖人てある、順彼佛願故の順は信順てある、かく親心をきかば信順、隨順、信心歡喜せずには居れぬ、夫信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起すといふはこの事てある、聞といふは衆生佛願の生起本末を聞て疑心あることなし之れを聞といふはこの事である、態々親が粥を作り、オモユを作りて吳れたのは、畢竟此私の病氣の爲であるといふことをいたゞかねばならぬ、彼因を建立したまへるを了知すると否とが正定聚と邪定不定聚の分れ目といふは此點てある、私一人が病の爲に親がかくまで心配して吳れたかといふことの分かりたのが惡人正機が分かりたのてある、彌陀の五刧思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさとの聖人の御自督、是てある。

○殊に注意すべき點は此親心をいたゞきて中心滿足して、いかにも心身飽足の感あることてある、能令速滿足、功德大寶海といふことは信順の徵てある、五濁惡世の有情の、選擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の、功德は行者の身にみてり、一升の德利に一升の水が溢るゝ心地てある、食事に滿腹したるものが、如何なる御馳走が來りても、更らに羨ましくも、食べたくもない心持てある、是が雜行雜修自力の心のすたつたのてある、若し此滿足がなかつたならば、不足の感がある、つとめ心がある、自制心が必要となる、決して感謝報恩の念が溢るゝものでない、專修にして雜心なるものは大慶喜心を得ず、彼佛恩を念報するの心なしといふが是てある、今迄の罪を滅さねばならぬとか、氣のあつかひとかいふものは皆雜修てある、慚愧といふも懺悔といふも、煩惱の氷解けて功德の水となることてある、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ、一塊の氷は其儘水となり、一團の炭は中心まで火になるのてある、私共の病をかくまで矜哀悲憫したまふ親心をいたゞけば、中心悅服して何にも他に望はありませぬ、歸命といふは歸悅歸稅と仰せられたは實に是てある。

○然るにこゝに大に警戒せねばならぬことがある、兎角信順々々と云ひながら、其內容は從順、服從の意味になりて居ることがある、唯信佛語であるから、何んでもかでも佛語ぢやから〳〵と抑へつける樣にして居るは信順ぢやない、服從、

壓服、極端に言へば屈從屈服である、夫に對して近代反動が來りて恰も雪に壓せられた竹がはね起る勢をもて靑年の思想に反抗の態度を來たしたる所以である、反抗しつゝある靑年の思想も決して感服は出來ぬも、之を壓して唯信佛語をふりまはして居るのは亦感服出來ぬ。

○又歸命といふは釋迦彌陀二尊の仰に從ひ召に叶ふといふ言なりときかば、ハイといたゞくことぢやといふ、是れ果して中心悅服の聲ならば實に結構である、されどハイといふ言は何時も前に所謂言ふことをきゝになり安い弊がある、即從順、溫順、柔順、感心な小供といふことは、たしかに一分のつくろいを免れぬものである、賢善精進の相に陷り安いのである、從來信者の多くは、此弊に陷らざるものは鮮い、特に信を生命とする眞宗なるがゆゑに其信を徹底せしめんとし、充實せしめんとし、滿足せしめんとする努力が先きだちて、言の上では信順の如く見ゆれども、いつの間にやら、一種の信順の形式を作り來りて、畢竟小笠原流の作法に過ぎざることになる、たとひ自己にては充實したるつもりなれども、畢竟信順の形式に叶はんとする妥協心の變化に過ぎないことになる、此心が自ら謀叛し、自ら裏切りする樣になれば忽ち、從順、溫順のハイ〳〵が破壞さるゝことになる。

○已上の如くすべて從順の態度の破壞若くは反抗を名づけて自覺とか、目醒めたとかいふて、靑年の思想界には頻に唱へられて居る樣である、なるほど僞善的、屈服的の從順の破壞はよしとするも、自我の主張放任では何等の信仰もなきのみならず、一も滿足も充實もなきことになる、病人が看病人の言に反抗し、粥やオモユが嫌ひと言ひ、無理に堅いものや甘いものを食ふて見たところが決して自覺でも、滿足でもない、此の如く親の言を退け親の言に從はぬ子供の心に對する親心をいたゞかねばならぬ。

○親の心を知らぬ子供ほど猶親は可愛相に思ふのである、親の言にさからふ子供に少しもさからはぬのである、親の身すてる子を捨てることが出來ぬのが親の心である、惡をも恐るべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆゑにといふは、決して惡をしてもよいといふ意味にあらず、如何なる不實なる態度を以て向ふても佛の我等を憐みたまふ眞實を妨ぐることは出來ぬといふことである、眞實といふことは單に正直といふことではない、親切といふばかりではない、若し不正直不親切の反抗に出遇ふて妨げられるものなれば眞實

とは言はれぬ、如何な不正直を以て向ふも不感謝を以て反抗するも、妨ぐることの出來ない眞實に遇ひたてまつれば、いかなる不實なる私も、つひには頭が下る、いかな不實も消やされて仕舞ふ、否不實は消えぬでも眞實に負けて仕舞ふのである、一旦律法の雪にはね起きた不實の竹も、此度は御眞實の重さには折れて仕舞ふのである、如何なる不實なるものも此御眞實に頭が下り腹ふくれねばならぬ、滿足せねばならぬ、是が功德の寶海みち〳〵て煩惱の濁水へだてなしてである、かほどまでの不實にあきれたまはぬ眞實が如來の眞實である、此眞實の前には我身は身をなげすてゝ初めて大悲の親心に信順隨順し奉るのである、眞心徹到するひとは、金剛心なりければ、三品の懺悔するひとゝ、ひとしと宗師はのたまへり、是が唯信佛語である、歸悅歸税である。

○私が佛間から下りて見れば、子供等は何時まで泣けど叫べど甘きものも、强い飯も喰べられないものゆゑ、致方なしに粥や、オモユや輕い菓子をたべて居る、いかに我等も人生にすねても、泣いても、結局致方なくなりて念佛して見ても、中心飽足の味かなけねば矢張專修にして雜心である、歎異鈔の第二章が動もすれば仕方なしの念佛になり、結果は如何になりてもよいと自分ぎめのあきらめ安心になり安いのである、地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候と覺悟をきめたのでは駄目である、御慈悲に滿足して、如何になりても不足なき中心より溢れたる自督であらねばならぬ。

○後醍醐帝の知遇に感激したる楠公一門は七度生れかはりて身を捧ぐるも何の惜む處ないのである、薩南の子弟に守りたてられたる南洲翁は、死なそうと生かそうと一身を健兒に與へたのである、我等がために飽まで御身を捨てさせられ、何れの行も及びがたき地獄必定の私の爲にいかなる惱も苦も煩惱も一一かねてしろしめして見捨てたまはぬ御眞實をいたゞけば、もはや何等の望もなし、地獄に落つるも、淨土に生るゝも結果の如何を顧るの要なし、唯飽まで見捨てたまはぬ御慈悲にたすけられまゐらせて腹一杯滿足して溢るゝものは唯慚愧の涙感謝の念佛である。

○眞實親心の深さに滿足すれば、もはやウマイとかマヅイとかいふ騷ぎぢやない、今日まで親に逆ふたり、誤魔化したりしたとの勿體なやと、たゞ南無阿彌陀佛〳〵といたゝくばかりである、否唯難有い〳〵ていたゞくばかりである、嬉しさを昔は袖につゝみけり、こよひは身にもあまりぬるかな、ハイ

と食ふの、食へよとあるゆゑ食ふのといふて居るのはやはり從順服從の心が離れなんだ、今は丁度私の病氣、私の身體に適ふ樣に作りて下された親心に滿足して、身心悅豫、歡喜踴躍の外はない。是實に本願相應である、如實修行である、利他の信樂うるひとは、願に相應するゆゑに、敎と佛語にしたがへば外の雜緣さらになし、親心をいたゞきてから甘いものをほしいの、强い飯をたべたいのといふ念慮が起るものか、よくも〳〵一人の病氣をかくまでもかねてしろしめしてたすけんとおぼしめしたちける本願の不可思議にてましますこと。

○子供の病氣は樣々なれども、各々一人〳〵あはれみて、あたへたまふ親心の同じきごとく、善惡業報の區別さま〳〵なれども、一々之を矜哀悲愍したまふ選擇願心に至りては衆水の海に入りて一味なるが如くである、我等が心のよきをばよしと思ひ、あしきをばあしと思ひ、善惡の沙汰ばかりをして居るのは、私一人のために苦勞して下さる親心をいたゞかぬゆゑである、親は卯の毛、羊の毛のさきにゐる塵ばかりのことまで一人〳〵俺まで見通して、そく〳〵の業報のものをたすけんとおぼしめしたまふ親心である。此御不可思議をいたゞきて見れば、唯信じたてまつるばかりである、仰ぎたてまつるばかりてある。

講義

『教行信證』信卷（菩提心釋ヨリ）

「第三回夏季求道會」

近角常觀

第六席　願成就釋

一　『一念多念證文』に曰く

前席の願成就文の意を『一念多念證文』には

諸有衆生といふは、十方のよろづの衆生とまうすこゝろなり。聞其名號といふは、本願の名號をきくとのたまへるなり。きくといふは本願をきゝて、うたがふこゝろなきを聞といふなり。またきくといふは信心をあらはす御のりなり。信心歡喜乃至一念といふは、信心は如來の御ちかひをきゝて、うたがふこゝろのなきなり。歡喜といふは、歡はみをよろこばしむるなり、喜はこゝろをよろこばしむるなり。うべきことをえてむずと、かねてさきよりよろこぶこゝろなり。乃至は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねをさむることばなり。一念といふは、信心をうるときのきはまりをあらはすことばなり。至心廻向といふは、至心は眞實といふことばなり。

眞實は阿彌陀如來の御こゝろなり。廻向は本願の名號をもて、十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。願生彼國といふは、願生はよろづの衆生本願の報土へむまれんとねがへとなり。彼國はかのくにといふ。安樂國ををしへたまへるなり。卽得往生といふは、卽はすなはちといふ。ときをへず日をもへだてぬなり。また卽はつくといふ。そのくらゐにさだまりつくといふことばなり。得はうべきことをえたりといふ。眞實信心をうれば、すなはち無碍光佛の御こゝろのうちに攝取してすてたまはざるなり。攝はおさめたまふ、取はむかへとるとまふすなり。おさめとりたまふとは、すなはちときひをへだてず、正定聚のくらゐにつきさだまるを往生をうとはのたまへるなり。云々。

と言はれてあります。

二　能の言は他力を表はす

さて己上は願成就の本文でありて、次には、

『又他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號を聞きて、能く一念の淨信を發し、歡喜愛樂せんと言へり。』

こは「又曰く」とあるも『大經』の異譯『如來會』の御文であります。今のと同じに初めて如來のお慈悲を聞いた一念が信心である味ひを、明かにお知らせ下されてあります。先づ「他方佛國の所有の衆生、無量壽如來の名號を聞いて……」――この聞くの字が茲願成就釋全體を通じてお知らせ下さるお言葉であることを注意しなくてはならぬ。「……能く一念の淨信を發して、歡喜愛樂せん。」――之が『正信偈』の有名なる

能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃。

の來るもとなのであります。親鸞聖人は中にも此の『如來會』を深くお喜びなされたと見え、始終この『如來會』の文を仰せられあつて、殆んど聖人常の御愛讀の御書であつた如く見えるのであります。「能く一念の淨信を發して」とは、如何にも佛力が屆いて下さる他力を言ふに適切なるお言葉である。何故かといふに、玆の能くの一字が、叮嚀に言へば一席のお話になる程、夫れ程深い意味を持つ文字なのであります。何故能字が夫れ程他力を表はすかと言ふに、抑々我々に對する如來の御呼び聲は如何に。

汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、衆べて水火の難に墮せんことを畏れざれ。

之が佛の御呼び聲であります。卽ち私共が人生に苦み、惱み、隔て、諸の惡しき心を持つ。斯のやうな淺間しき仕て見やうなき者に對し、佛の仰せは何うかといふに「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん」――卽ち能の字は、私が飽く迄不實であり、申譯け無きに係はらず、其の惡しきに飽く迄呆れず、哀れみ、飽く迄お見捨てなき思召の、遂に私の不實に勝ちおほせる迄、それ迄强きが能である。で能字は能力の能であつて「能ふ」といふ字意である。能ふとは私共が如何に罪多からうが、惱み深からうが、其深き者程彌々捨てられぬのお心より、遂に其者を助け能ひ、救ひ能ふの思召が能字である。で『愚禿鈔』とて、聖人が晩年に自督をお記しなされた聖敎の中には、此の能字の味ひを仰せられあつて夫れには

能の言は、不堪に對するなり。疑心の人なり。

と言はれてある。即ち「不堪」に對するなりとは、不堪は即ち「堪えず」である。「堪えず」の反對は「堪える」であつて、即ち「能ふ」である。「堪えず」はこれ疑心の人であるといふは、「自分如き罪深きことでは救はるゝに堪えない」など、始終「堪え無い〳〵」と言うて居るは、即ちまだお慈悲に疑ひ心がのかぬ疑心の徒であるからである。「人生此のやうなことでは助るに堪えまい、こんなことでは、如何に佛かと仕やうがあるまい」と、言ふてる中は人生唯疑ひばかりであり、迚も人生より出ることと出來ぬとてあります。處が今其の反對は、如何程罪深くとも其の罪に呆れず、惡しければ惡しき程彌々見捨てざる心をもて、倦く迄其者を捨てぬとの思召が、「我能く汝を護らん」のお意である。即ち能の一字は、倦く迄親切を以て私の不實に勝ちおほせるとの、大悲の有り切りのお言葉なのであります。夫れ故此の倦く迄救ひ能ひ、助け能ふとの能字のお心が有難い。際立てゝ言へば、此の能字のお心が、私の心に届いて下された處が實に一念の信心なのである。夫れなればこそ我々之を頂いた一念に始めて

　衆生貪瞋煩惱中、能生淸淨願往生心

と、我々の泥土の心の中に能く蓮の心を生じ、我々の煩惱の胸の中に、此の本願の不思議を聞くなり、正覺の淨らかな信心の華が開き能ふのである。故に「能く一念の淨信を發して」は、此の佛の「能く」の思召が届いて下されて、即ち我々の泥土の心の中に、能く淸淨蓮の如き淸らかの信心を發するとであります。殊に聖人は常に好みて、此の淨信なる言葉をお用ゐなされた。我々が自分の心を常に綺麗に保たうと、自分て自心を淸淨にするは、作り物であつて、聖人の仰せられる淨信では無い。けれども「無量壽佛の名號をきいて、能く一念の淨信を發し云々」と、我々此の佛の廣大のお心を知らされると、如何な不實の私も自ら其の思召の忝けなさに頭が下りて、能く一念の淨信を發し、歡喜愛樂せざるを得ぬやうになるのである。之が實に一念の淨信の味ひなのである。玆に於てか『正信偈』にては先づ

　本願の名號は正定の業なり。至心信樂の願を因と爲す。等覺を成り、大涅槃を證することは、必至滅度の願成就なり。如來世に興出したまふ所以は、唯彌陀の本願海を說んとなり。五濁惡時の群生海、應に如來如實の言を信ずべし。

と、斯く『大經』によりて本願のお意をお示し下され次に即ち

　能く一念喜愛の信を發すれば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得。

と、是れ遣る瀨なき本願の親心によりて、終に一念開發の願成就の文をお擧げ下されたものなのである。我々煩惱は遂に絕えざれども、斯く倦く迄お見捨てなき佛の思召の故に、終に一念此のお慈悲を知らされると、不思議なる哉煩惱の泥の中に能く一念歡喜愛樂の淨信を發し、煩惱を斷ぜずして涅槃を得させて頂くとであります。

三　其佛本願力

次は

『又其の佛の本願力をもつて、名を聞いて往生せんと欲せんと言へり。』

こは有名なる『大經東方偈』の

　其佛本願力、聞名欲往生、皆悉到彼國、自致不退轉。

の文をお擧げ下されたものにて、今更煩はしく申上る迄も無いのである。次には

『又佛の聖德の名を聞くと言へり。』

阿彌陀佛の南無阿彌陀佛の御名は、有りとある萬德の籠つて有る御名故、即「佛の聖德の名」である。而して其の名を「聞く」と言へり」玆にても此の聞くが肝腎である。聞くは唯一應耳に聞くのでは無い、佛の御見捨て無き廣大のお心は、一に私が仕て見やう無き爲めであることを眞に聞くのである。之を聞くと、如何なる者でもびつくりして其の思召の有難さに頭が下らざるを得ぬのである。故に善知識の言葉の下に、佛のお慈悲の眞のお心を聞かして貰ふことが何より肝腎である。之を本當に聞かせて貰ふでなけねば、何程心を苦しめても遂に人生夜が明けることは無いのであります。

四　聞不具足

次は『涅槃經』の文を擧げさせられ、

涅槃經言。云何名爲聞不具足。如來所說十二部經。唯信六部、未信六部。是故名爲聞不具足。雖復受持是六部經、不能讀誦、爲他解說、無所利益。是故名爲聞不具足。又復受是六部經已、爲論議故、爲勝他故、爲利養故、爲諸有故持讀誦說。是故名爲聞不具足。已上

聖人はよく『涅槃經』をお引きなされ、而も引かれる所が殆んど決まつてある。既に今回の講義に於ても、本文後半の處は第二席菩提釋(本誌第四號所載)御自釋中の御引文によりてお話した處なのであります。文意は文通り故殆んど言ふ迄も無いのであるけれども、

『云何が名けて聞不具足と爲る。』

即ち肝腎は聞くの一つである。故に聞くは本當に本願の御眞意を聞くてなけねばならぬといふ證文として、玆の文をば御引用下されたのである。

『如來の所說は十二部經なり。』

は、こは佛が私共にお說き下さるに種々の說き方がある。或は譬喩を以てお說き下されたり、偈文を以てお說き下されたあり、又不問自說と言つて、問ふ者の無いのに自ら進んでお說き下されたあれば、又本生譚如き過去世の因緣をあげてお說き下されたあり、又未來記如き未來世の結果を豫言してお說き下さるもある。斯く色々御說法の方式が十二通りありて夫れが即ち十二部經てある。故に十二部經は、御經が十二通りあるといふのではなくして、其の御經をお說き下さるに、我々凡夫の心にはまり易いやう、お說き下さる方式に十二通りあるといふのである。而して中

『唯六部を信じて未だ六部を信ぜず、是の故に名けて聞不具足と爲す。』

は、之は中何々を信じて、何々を信ぜぬといふのでは無い。佛の仰せ丸々を信ずるのでなくして、自分の心に都合好き部分丈けを取り、都合惡しき部分は信ぜぬ者の事を仰せられた

のである。丁度昨夜の談話會に武田さんが懺悔して、自分は久しく自分の都合よき部分丈けを喜び、都合悪い處は捨てゝ居たと言はれたが、之が即ち六部を信じて、六部を信じて居ぬ有様なのである。自分の機に向く處丈けを取り、機に向かぬ處は切り去り、放つて置く狀態なのであります。て之ては本當に聞いたのでは無くして、即ち聞不具足である。又

『復是の六部の經を受持すと雖、讀誦に能はず、他の爲に解說するは利益する所無けん。是の故に名けて聞不具足と爲す。』

佛のお慈悲は何れ丈けを聞くと分り、何れ丈けでは分らぬといふのでは無い。設ひ一部分でも眞に其の仰せに籠る佛のお心がきかれると、一度に全部が頂ける處のお慈悲なのである。爾るに設ひ其の六部を受持しても「讀誦に能はず」は其の意味より言ふ時は、其の六部丈けが本當に頂けるならよけれども、心底より頂けて居ずに、唯他の爲めに解說し、饒舌り、話し聞かす爲めに受持してるのならば、何もならぬ。私共が眞に御慈悲を頂かずに、唯口先きばかり人に話して居るのなら、聞不具足も甚しいと言はねばならぬ。又

『是の六部の經を受け已つて、論議の爲めの故に、勝他の爲めの故に、利養の爲めの故に、諸有の爲めの故に、持讀誦說せん。是の故に名けて聞不具足と爲すとのたまへり。』

設ひ其の六部を誦讀して、其の意味を知つたと仕ても、眞實出離の大事よりするならよけれども、他と論議の爲め、勝他の爲め利養の爲め、其の外あらゆる何か爲めにする處ありて、お慈悲を言ふて居るのならば、皆な是れ名聞を本とし、利養を旨とし居るのである。故に斯くの如く何か一點でも爲めにする處から、言ふて居るのならば、皆な是れ聞不具足であるとてあります。斯く言ふと、「イヤ法を聞くのに、そんな考へは初めから毛頭無い」と言はるゝかも知れぬも、然うでは無い。極端に言ふと、此のお慈悲に最後の一點でも薄暗い處があるとすると、如何程眞面目にやりて居つても、其の言ふて居る總てが皆な本物で無いのである。故に茲は大事の處故よく聽いて頂かねばならぬ。「イヤ法を聞く程の者は皆な眞面目」と思ふて居らるゝのであるけれども、眞實お慈悲に夜が明ける迄は、皆な之になつて居るのである。即ち皆樣が法を聞かるゝに、或は人格を高める爲めであり、乃至は煩悶を取る爲めであり、未來安心を得度い爲めであるならば、皆な是れ爲めにする處ありて言ふて居るものにて、眞實とは言へぬのである。信仰は、信仰夫れ自身の爲めであつて、我に何かの爲めといふことがある可きで無い。設ひ此の首をはねられても如何にして此のお慈悲一つは捨てられぬのが、信仰の信仰たる處である。設ひ地獄に墮ちたりとも、此のお慈悲一つは頂かずに居られぬのが、お慈悲のお慈悲たる處であります。

五　聖光上人、法然聖人に面謁の時の事

之につき餘りに著しき例なれども『口傳鈔』に在る故申しますが、親鸞聖人が法然聖人の許へ、常に此の他力のお慈悲を聽聞にお出かけになつた。廿九歳御安心の時より三十五歳御

流罪の時迄、始終聽聞に御通ひになる間に、或時道すがら一人の修行者にお出遇ひなされた。其の時聖人は車に召して居られたが、其修行者が御者の者に向つて申すには、「一つお尋ね仕度いことがある、此の京洛中に八宗兼學智慧第一の聖人が在らせられると聞きますが、何處にお出になるか御存知であるか」とお聞きした。そこで聖人が仰せらるゝには、「八宗兼學智慧第一と申せば、恐らく法然聖人の御事であらう。夫れならば幸ひ自分も法然聖人の處へ參る處であるから、一緒に御案內致さう」といふことになり、「夫れてはお願ひする」となつて、「夫れでは此の車に乘れ、」と頻りに聖人は勸められるけれども、修行者は辭退して如何にしても乘らうと言はぬ。聖人は其の我から隔てる修行者を、御者の者に言ひつけて無理に車の上に引き乘せ、夫れより御同車で黑谷の法然聖人の禪房へ御出でかけになつた。そして法然聖人のお前に出て言はれるには、「道すがら九州鎭西の者と申して、一人の修行者の御坊を尋ねて參つたるに遇ひ、只今之に伴つて參りました。お遇ひ下されやうか」と申上げられると、「それなら遇はう」との仰せで、聖人は其の修行者を案內して、法然聖人の前に連れてお出になつた。すると此の修行者も中々の人で、法然聖人と兩々對顏の時に、眼光と眼光と互にハタと睨み合つた切りで、少時は双方無言であつたと申すのである。斯くてやゝ久しくあつて法然聖人の方より先づ口を切つて「お僧はいづくの人ぞ、又何の爲めに見えられた」とお聞きになつた。すると修行者申上るには、「我はこれ鎭西のものなり、求法のために華洛にのぼる、よつて推參つかまつるものなり」とあつて、「自分は鎭西から法をたづねて參つた者だ」と申上げた。すると法然聖人は重ねて、「求法とは何れの法を求めらるゝか」とお問ひになつた。修行者「念佛の法を求めに參つた」と答へると、言下に聖人は「其の念佛は唐土の念佛か、日本の念佛か」とお問ひ反しになつた。之には修行者も聊か行き詰つて、何の事だか一寸分り兼ねた樣子であつたが、少時考へて「唐土の念佛を求めて參つたのである」と申上げた。――之には少し說明が入る。日本に於ても夫れ迄念佛の法は澤山あることはあつたので、永觀律師の『往生十因』などにも、念佛往生のことは書かれてあり、又聖德太子、中將姬の昔から念佛の法はあることはあつたのである。併しながら今法然聖人の說かれる念佛は、唐土の善導大師のお勸めによる專修專念の念佛であつたのである。故に聖人は此の事を仰せられたのである。そこで修行者が、「イヤ私は唐土の念佛を求めて參つたのであると」申上ると、法然聖人此の時初めてにこりと笑み給ひて、「さては善導和尙の御弟子にこそはあるなれ」と、初めて御和ぎなされたと申すのである。そこで修行者は、如何にも今の問答の樣子で聖人の智慧優れ給へる有樣に頭が下り、早速笈の中より硯を出し、自分の名字を認めて差上げ、弟子となつたといふのである。そこで之は何かと言ふに、此の修行者は、今日でいふ所謂學問修養を旨として居られる人なのである。自分はいつ角の學匠である、修行も充分に出來るとの考より、都に智慧第一の法然聖人なる方が在らるると聞き、一度親しく遇ひて問答し、若し彼が我以上ならば我の方が弟子となり、若し我以下ならば彼の方を弟子とせんと、此の考

へより態々都に上り聖人に面接した處が、斯く聖人の智慧優れ給へる有様に敬服して、立所に弟子となつたといふのであります。

六　聖人が求道の態度

そこで之は言はぬ方がよいかも知れぬも、此の修行者は、即ち鎭西の聖光上人とあるのである。勿論此の話は淨土宗に於ては異論のあることとて、年代よりいふと聖光上人の方が、親鸞聖人より兩三年先きにお弟子となつて居られるといふのである。併し年代より言へばをかしいかも知れぬも、兎に角聖光上人て有らうが誰れで有らうが、斯ういふ事實があつたと丈けは言はれるのである。處で此の話は非常に眞面目な事て、此の修行者がこれ程修養し、學問し我が修養の程度を都に上りて法然聖人と較べやうと、態々出て來たといふは決して惡い事とは言へぬ。寧ろ甚だ眞面目なる態度と言はなければならぬのである。去りながら根本が人生の苦に惱みて法を求めるといふのとは、非常に違ふのであります。親鸞聖人が法然聖人の扉をお叩きなされたは、十九の時より二十九の時迄、安心の道を求めに求めても、遂に安心を得る事が出來なかつた。遂に力盡きて或は磯長の靈廟に祈り、又は根本中堂に參籠して頻りに出離の要法を求められたけれども、終に如何んともすることは出來なかつたのである。而して其の最後に終に六角堂に參詣して、其のお手引きで初めて法然聖人の吉水の禪坊に參つて、立所に他力本願の趣きを受得なさる事が出來たのであります。て『嘆德文』には此事を仰せられて、

定水をこらすといへども、識浪しきりに動き、心月を觀ずといへども妄雲なをおほふ。しかるに一息つかざれば千載ながくゆく。何んぞ浮生の交衆をむさぼりていたづらに假名の修學につかれん。すべからく勢利をなげすてゝ、たゞちに出離をねがふべしと。しかれども機敎相應凡慮あきらめがたく、すなはちちかくば根中堂の本尊に對し、とをくは枝末諸方の靈崛にまうでゝ解脱の徑路をいのり、眞實の知識をもとむ。ことにあゆみを六角の精舍にはこんで、百日の懇念をいたすところに、まのあたりつげを五更の孤枕にえて、數行の感涙にむせぶのあひだ、さいはひに黑谷聖人吉水の禪室にいたりて、はじめて彌陀覺王淨土の秘扃にいりたまひしよりこのかた、三經の冲微五祖の奥賾、一流の宗旨相傳あやまつことなく、二門の敎相稟承よしあり。

云云。

又『御傳鈔』には、

建仁第一の曆春のころ、上人廿九歳隱遁のこゝろざしにひかれて、源空聖人の吉水の禪坊に尋ねまいり給ひき。是則世くだり人つたなくして、難行の小路まよひやすきによりて、易行の大道におもむかんとなり。眞宗紹隆の大祖聖人、ことに宗の淵源をつくし、敎の理敎をきはめてこれをのべ給ふに、たちどころに他力攝生の旨趣を受得し、飽くまで凡夫直入の眞心を決定しまし〳〵けり。

即ち聖人のは彌々自力てはいかぬとなつて、詮方つきて法然聖人の許に出かけ給ふたのである。自分の修養學問に一ぱし賴む處がありて、問答する積りで出かけたとは大に面目が違

ふのであります。て今の事實談を以て宗派的偏見の上より聞いて貰つてはならぬけれども、この話は大に味ふ可き話であるのである。

七　法師には三つの髻あり

さて斯く今の修行者は、此所に驕慢貢高の兜を脱ぎ、夫れより法然聖人のお弟子となり、久しき間聖人の許に居られたが、數年の後本國戀慕の志あるとて歸國を思ひ立ち、脊に笈を負ひて聖人の前に出で、御暇を申上げられた。――玆は直接本文で申上ると、

兩三年ののち、あるときかご負かきおひて、聖光房聖人の御前へまいりて、本國戀慕のこゝろざしあるによりて、鎭西下向つかまつるべし、いとまたまはるべしとまうす。すなはち御前をまかりたちて出門す。聖人のたまはく、あたら修行者がもとどりをきらでゆくはとよと。その御こゑはるかにみゝにいりけるにや、たちかへりてまふしていはく、聖光は出家得道してとしひさし。しかるにもとどりをきらぬよしおほせをかうふる、もとも不審。このおほせ耳にとまるによりて、みちをゆくあたはず。ことの次第をうけたまりわきまへんがためにかへりまいれりと云云。……

即ち修業者は門を出ようとすると、思ひがけなく「あたら修業者が髻を切らで行くはよ」との御聲が聞えたものだから、サア修業者は出家得道して久しくなるに、此のお言葉の意味がわからぬ。之が耳にさはりてもう向へ行かれぬから、歸つて其の仰せの旨をば伺ふと、聖人の仰せらるゝには、

……そのとき聖人のたまはく、法師にはみつのもとどりあり。いはゆる勝他、利養、名聞これなり。……

髻といふは、即ち勝他利養名聞三つのことである。

……この三箇年のあひだ、源空がのぶるところの法門をしるしあつめて隨身す。本國にくだりて人をかろんじしたがへんとす。これ勝他にあらずや。……

即ち人に誇り度いといふ勝他の一の髻がある。

……それにつけてよき學生といはれんとおもふ。これ名聞をねがふところなり。……

其の爲めには、人に褒められたいといふ名聞の髻がついて來る。これが二の髻である。

……これにより檀越をのぞむこと、所詮利養のためなり。……

斯くして澤山の信者を得度いといふ、これ三の利養の髻である。即ち此の三つの髻の爲めに、日頃聽聞の法門を書き集めて本國に隨身しやうといふのである。故に

……このみつのもとどりをそりすてずば、法師といひがたし。よてさまふしつるなりと云云。

聖人が意外にも斯の如き仰せであつたものだから、修業者も大にびつくりして我が根性の淺間しさを恐入り、即ち、

……そのとき聖光房、改悔のいろをあらはして、負のそこよりおさむるところの抄物どもをとりいでゝ、みなやきすてゝまたいとまをまふしていでぬ。……

笈の底より納め置いた筆記類を皆取出し、即座に燒き捨てゝ、改めて暇申して出て行つた。――

……しかれどもその餘殘ありけるにや、つひにおほせをさしをきて、口傳にそむきたる諸行往生の自義を骨張して自障障他すること、祖師の遺訓をわすれ、諸天の冥慮をはゞからざるにやとおぼゆ。かなしむべし。をそるべし。

斯く隨分思ひ切つた事が書いてある故、此の話は淨土宗の人の頗る不愉快がられる處の話なのである。けれども今私の言ふのは、斯ういふ事實が確にあつたといふことを言ふのではない。注意せぬと我身の上に之があるといふ事を申度いのであります。

八　名聞、利養、勝他、論議

之は私共、動もすると、信仰を以て、人格を高めるのぢや、修養ぢや、乃至立派になるのだなどゝいふ。其の人格や修養と言うて居るのが、結局名聞、利養、勝他になつて居ることが多いのである。即ち自分がいつ角善くなり度い爲め、立派になり度いために言ふて居るのであるから、即ち名聞であり、勝他である。イヤ宗教は社會國家の上より見て、人の心を和げるから、宗教でなければならぬなどゝいふと、大層眞面目なる主張の如く聞えるのであるけれども、それだから宗教をやるのだといふと、是れ又論議の爲めであつて、本當の事にはなつて居らぬのであります。處が今我々名聞だの勝他だの、そんな事言うて居られる段ぢや無い、今自分が立つても居ても居られぬ淺間しき心を抱えて、致し方なき身であるとなると、親鸞聖人が法然聖人をお訪ねなされたお心が即ち之れである。早い話が私共今病氣である。故に何うか病氣を好くなり度い爲めに、此の一服の藥を飲むといふのであると、夫れは結局自分をよく仕度い爲め、病氣を直し度い爲めの藥に外ならぬのである。處が今「その病氣をよく仕度いのは無理もなけれども、そのお前の病氣は迚も醫藥の力では好くならぬ、不治である。故に其の汝が可哀相で其の爲めに與へる此の藥である」と渡されてみると、今迄何處にか賴みがあらうと思うて居つた此の世も、今は一つも賴みにならぬ。利養、名聞、位置、財產、健康、今迄何のかのと言うて居つたものは、今は悉く皆な何處へか行つてしまつて、何一つ當てになるものはないが、其の如何なる道でも仕やうなき、一點の據り所なき者の爲めに、偏く迄哀れみ捨てぬとある大悲のお藥が、實に此の唯念佛の一服のお藥なのである。故に「汝如きもう仕やうの無い危篤の病人に飲ます藥は、もう此の唯念佛の一つである」と與へられてみると、其の藥は最早や之て本復する爲めに飲むのでは無い。「自分如き如何にしてもよくなれない、回復出來ない者の爲めに作つて下された藥であるが、有難や〳〵」と、即ち『歎異鈔』二章に、

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀に助けられまいらすべしと、よきひとのおほせをかうふりて、信ずるほかに、別の仔細なきなり。念佛は、まことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

とあるは茲の味ひをばお知らせ下されたのである。即ち名聞利養である間は、何うしても「何れの行も及び難し」とはならぬ、何れの行が目についてある。處が「今はそんな人格が何うの、修養が何うのと、そんな餘裕のあることを言ふてられる我々ぢや無い「何れの行も……地獄は一定すみかぞかし」此の地獄一定の自分を偏く迄お見捨てなき大悲の思召と聞くと、實に此の死ぬより外に仕やうなき自分の爲めに、最早や此の藥ばかりと御作り下されたる南無阿彌陀佛のお藥である。故に之を承はつてみれば「信ずるより別の仔細なきなり。」もう他の何れの道も絕て果て、如何なる人にも捨て果てられたる自分を、お見捨てなきは唯此の廣大の御思召一つ故、即ち「唯念佛」である。故に「唯念佛」は名聞利養勝他論議のなくなつた處なのであります。

九　唯念佛と雜行雜修

次は

光明寺和尚云、一心專念、又云、專心專念。已上 然經言、聞者、衆生聞佛願生起本末無有疑心、是曰聞也。言信心者、則本願力廻向之信心也。言歡喜者、形身心悅豫之貌也。言乃至者、攝多少之言也。言一念者、信心無二心故曰一念。是名一心。一心則清淨報土眞因也。

初の「一心專念」「專心專念」が、一心一向の有難い處なのである。故に之を叮嚀に話し度いのでありますけれども、最早や時間が無くなつた。併し次の「聞くと言ふは、衆生佛願の生起本末を聞いて疑心有ること無し、之を聞くと曰ふ」を言ふと專心專念の譯けは詳く分る故、細かくは次席に一緒にお話するとして、一言信仰上の味ひより、眞宗と餘宗との區別、即ち阿彌陀佛と諸佛との區別を申すことゝ致します。抑も阿彌陀佛の本願のお慈悲とは何うかといふに、他の如何なる藥でも醫者でも到底治するに治せられぬ我々は重病人である。故に其の重病人が哀はれてあると、其の者を助くるが爲め救ふが爲めに、態々特別の藥をこさえて下されたお醫者が現はれ下されて、其のお醫者が阿彌陀佛であり、其の下さる藥が南無阿彌陀佛といふことなのである。故に此の阿彌陀佛のお惠みなることは、一應二應のことては無い。他の一切諸佛は善いことが出來る者なら助けて下さるけれども、惡人をば助けて下さることは無い。即ち諸佛の敎は「衆惡莫作諸善奉行」てある。故に其の諸佛の敎へては助らぬ者、其の到底善の出來ざる者を遺る瀨なく、お見捨なき廣大のお心より、其の淺間しき者の爲めにお建て下されたが廣大なる佛の御本願であり、其の他の如何なる藥でも不可ぬ者にやらうとの、お親切の塊りのお藥が、南無阿彌陀佛といふことなのである。て法然聖人は御一代の間、このことばかりをお知らせ下された。處が之を聞いて居られた三百八十餘人の御門弟達は、聞くは皆な此の仰せを聞かれたのであるが、其のきゝやうが、だか

ら南無阿彌陀佛々々々と、之を頂いて飲む藥となつてしまつたのである。即ち五逆十惡具諸不善の仕て見やうなき重病人を助けるための南無阿彌陀佛なれば、之を頂いて助かるのだとなつてしまつたのである。で三百八十餘人の人達は、皆な一やうに聖人の敎をきいて喜んで居られたのであるが、肝腎の聞きやうが皆な違うてあつた。「此の藥は危篤の病人の飮む藥」と、流石藥の能書は直き〳〵聞かれた丈けに、よく讀んである。而も其の飮みやうがたつたひと所間違うてあつた。といふは斯く飮むことに力が這入つてある丈けに、自然飮んで善くなるのだといふ腹が何うしても失せにくかつたのである。で自然の間に「然ういふ重病人をば助け給はんがための此の一服の名藥である。故に自分はまだ夫れ程の重病では無けれども、そんな危篤の病人さへ助かるのであるから、之さへ飮んで置けば間違ひは無からう」と、即ち南無阿彌陀佛々々々と稱へるとなつて居つたのである。で之になると即ち『歎異鈔』の

　惡人なをもて往生をとぐ、いかに況や善人をや。

て、能書き丈けは如何にも能く讀んであるけれども、自分がまだ眞に其の危篤の病人とはなつて居らぬ。故に主藥としては此の藥を用ふるけれども、間に合ふ限りは他の藥だつて飮んでよいでないか、といふやうなことになり、遂に補ひ藥、養生藥として他のも合はせて飮まう、となつて來たのである。すると結局信仰といふことも、念佛といふ意味も、畢竟は自分が修養の爲めの信仰となり、修行のための念佛となる。故によくなる爲めには南無阿彌陀佛もまことに結構であるも、斯ういふことも仕てよからう、あゝいふこともやつたがよからうと、即ち雜行雜修に陷入るとなつて來たのである。すると即ち先きの修行者の間違ひである。故に名聞利養勝他といふと、信仰上非常に惡しき如く思へるのであるけれども、眞に頂ける迄は眞面目と思つてやつてる事が、皆な之になつてあることに氣をつけねばならぬ。すると口には唯念佛の一つと何程言うて居ても、ちつとも唯にはなつて居やせぬのであります。

一〇　親鸞聖人の頂かれたは

處が親鸞聖人の頂かれたは、たつたひと所なれども、其の佛の本願に「五逆十惡の惡人である、迚も仕やうの無い危篤の病人である、孝養父母奉事師長も出來ざる愚人であると仰せられたは、人のことでは無い、親鸞自身が實に其の身の上である」と、茲たつたひと所なれども、此のひと所が實に頂き處なのである。今親の方から「汝如き迚も外の藥では助らぬ重病人には、最早や此の親の一服の藥である、故に之をやるから飮め」と折角つきつけられて居ながら、「イヤ私は他の藥も飮めます」では仕やうが無い。現に自分が人格が高められたり、一寸でも自分をよくすることが出來るなら、外の藥に手を出しも仕やうが、今は何れの行も及ばざる、何れの道も絕え果てた五逆十惡の親鸞である、破戒無戒愚癡無智の親鸞であると、——夫れ故聖人は自ら愚禿と名のらせ給ひた。其の淺間しき、仕て見やうなき親鸞の身は、既に三世の諸佛にも捨て果てられ、如何なる藥でも致しやうなき親鸞であるが、

その哀れなる親鸞の身を哀はれみ思召し、其の爲めに態々一服下さらうとある選擇本願の南無阿彌陀佛であるかと、即ち法然聖人よりお頂きになつた選擇本願念佛の御敎化が、聖人にありては全く人ごとぢやなかつた。現に十九の年より廿九の今日に至る迄、如何に出離の道を求めても、戒行一つ出來ず、修行一つ出來ぬ、何れの道も及ばざる此の親鸞が爲めの遣る瀬無き大慈の南無阿彌陀佛のお惠みてあつたかと、——そこで聖人は『歎異抄』には

　彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

と。又『信卷』には

　誠に知ぬ、悲しい哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快まず、耻づべし、傷む可し矣。

此の愛欲名利の親鸞を、之を徇く迄お見捨てなき大悲の廣大のお心となれば、最早や之を頂くばかしとなつたのであります。で茲になると、最早や南無阿彌陀佛ばかしである。外の藥が多少でも間に合ふ位なら、南無阿彌陀佛の藥は入らせぬのである。「南無阿彌陀佛も結構であるも、外の藥も用ゐてもよからう」などゝは、そは他の藥をも飮み得る人の言ふ可きことである。自分如きは戒行坐禪の藥では到底間に合はざる者、其の者の爲めに大悲の思ひやるせなく、下さる一服の藥を頂けば、最早や此の藥の外に無いといふ、茲をお頂き下されたが、實に聖人のお知らせ下さる淨土眞宗であるのである。で茲になると自力聖道門の人が設え何と言はうが、外の藥で間に合ふ人は、外の藥でゆくがよい、自分に於ては最早や外の藥では仕て見やうなき危篤の重病人である。危篤の病人がまだ自分の危篤を知らずに居るに對し、友人がまあ飮める丈け藥を飮め〳〵と、即ち出來る丈け〳〵でゆくが、聖道門自力の敎えてある。又設え淨土門念佛の敎えてあつても、外のお弟子方の言はるゝ處は、「其の重病人の爲め態々御成就下された最後の一服の藥であるから、眞劒に飮め〳〵」と、即ち病氣本腹の爲めに言ふのであつて、眞に何れの道も絕えはてた不治の難病人に對する思召の深さは言はれなかつたのである。處が聖人の御知らせ下さる淨土眞宗は、

　阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪は如何ほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべしと、おほせられたり。

云云。（御文）

即ち「そのやうにまだ外の藥が間に合ふと思ふて居るのが、彌々可哀相で見て居られぬのである。慘酷ながら言ひ聞かすがお前は最早や助からぬのぢや。お前は再び起き上る積りで居るか知らぬが、最早や望みの絕え果てたる身の上である」とお知らせ下さるのである。して「お前ばかりが然うぢや無い、斯く言ふ自分も同じ重病に罹りながら、長々知らなんだのである。だから之を言ふのであるが、故に自分も頂いて喜んで居るのであるから、お前も之を頂け、」と仰せ下さるのである。「茲にお前や自分の如き、何れの道でもいかぬ病人の

爲めに、態々御成就下されたる南無阿彌陀佛の一服のお藥がある。故にお前も之を頂け、」と——私共斯く迄廣大の仰せに接すると「親鸞に於きては唯念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せをかふむりて信ずる外に別の仔細なきなり。」最早や此の外に無いのであります。

二　一心專念、專心專念

斯く話すと思ひ出すが、今日も御來聽下されてある萩野さんや私の親友の故西川居は、平日熱心に聞いて下されたのであるけれども、何うしても分らなかつた。彌々病氣となり胃癌と決定したにつけ、自分でももどかしくなつて、「君慈悲なんて何うしても分らぬ」と言はれる。其時言下に私は申した。「我々は岸の下に居て、如何にしても登れざる者なのである。夫れ故其の上れぬのが哀はれと、上より一條の繩を下して下された。君、岸の下に居て今や海に落ちんとして居る者が、如何にしたつて岸の上のことが分る筈は無いではないか。岸の上のことは上らぬ中は彌勒菩薩だつて分らぬ。今君は何と思うて居らるゝか知らぬが、命旦夕に迫つて居らるゝのである、入らざる岸上の詮索をするよりも、もう今が仕て見やうなき場合に至つて居るのでないか。お慈悲の譯けが何う斯うといふ如きは、言ふてる自分さへ念佛の譯けが分つて稱えて居るのぢや無い。唯斯くの如きを俺く迄捨てさせ給はぬお慈悲一つが有難いのである。聖人が親鸞におきては、唯念佛して……仔細なきなり、と仰せられは玆である」と話した。すると默つて之を聞いて居た西川君は、此時涙を催うし、「あゝ君よく今迄言うて呉れた。君の言ふて呉れたのが、實によき人の言葉である。自分は成る程最早や仕て見やうない體である——成る程よき人の仰せをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり。——何ういふ譯け合ひがあるか知らぬも、あすが日にも下はもう眞暗がりの海である。斯くの如き者が哀はれてすてられぬとの仰せと聞けば、信ずる外に別の仔細なきなり。——成る程有難い〳〵。何うか家内も子供も、皆んなが此のお慈悲一つは忘れて呉れるな〳〵」と言はれた。——「念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。」——念佛の譯け何うやら、死後が何うなるのやら、それが分りて信ずるのでは無い——「そのゆへは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をもうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」——外に出來る者が、此の仰せを頂いてやりぞこなつたのならば、だまされたといふ後悔も有らうが、有難や此の仕て見やうなき身に於ては、此の仰せ一つが何よりの賴りである。此の場合に於て、此の見捨てぬとのお慈悲の外に、何一つ賴みになるものはない。設え外の藥飲めと言はれた處が、もう如何に仕ても飲む氣はせぬのである。このお慈悲一つで充分である。——故に『歎異抄』又の仰せには、

しかれば本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛に

まさるべき善なき故に。惡をもおそるべからず、本願をさまたぐるほどの惡なきが故に。

考へれば今迄一代やり來つたこと、一つとして本當の事は無い。皆な申譯けなき事ばかりであるに、夫れをやるせなく哀はれみ思召し、見捨て難いとの今日迄の御苦勞である。之を聞くと、如何な私も最早や「惡るくてもよい」では無い。去り乍ら成程いかにも仕て見やうなかりし私の爲めに、水火の難を畏れなとのやるせなき御眞實と頂くと、惡しければ惡しき丈け彌々お慈悲の有難く、惡の恐るべき處は更に無い。斯くて唯お慈悲一つをありがたく喜ばして貰ふ處が、即ち一心專念である。專心專念である。一心一向である。故に

『光明寺の和尚は、一心專念と云ひ、又專心專念と云へり。』之が聖人のお知らせ下さる一向專修の味ひであります。

（夏季求道會第三日第二席）

遠流却喜化邊民　　唯思師恩不思辛
齡滿九旬圓寂月　　德餘六百菩提春
非僧非俗名愚禿　　大信大行仰見眞
慚愧何堪誦遺訓　　鴨河之水捨斯身

告白

ほとけ様お一人きり

小澤はる

此度近角先生から告白せよと仰せを蒙りましたが、こんな愚の者の告白を『尊い紙上に御掲載して戴くは、いと恐れ多く御恥かしい至りであります。信仰を得たと言ふ事か何やらわかりませんが、御慈悲のありがたさ、尊さ、うれしさまゝを、思ひの湧き出づるまゝに書き連ねて御教化をねがひ上げます。拙なき筆御はんじ下さるやふ御願申ます。

私は明治卅七年の春、人から『信仰の餘瀝』を送つてもらひまして其れを讀みました。其時分、其人の志が分らなかつた私は、自分のことを責められる心地がして、之れはあてこすりに送つて呉れたと思つて、之れを親友に見せました。親友は之れはありがたい事が書いてあるから下さいと申しますから友に遣りました。其當時、私の心は、幼時より受けて居つた基督教の信仰が鐵の如く冷えて、昔の信仰の歡びが不思議に思はれ、其の歡びを呼び起し度く幾度か教會に行きましたが、どふも人々の態度が氣に入らなくて踊りました。其内に基督教の牧師の奥さんでありながら、人を惡く言つたり、又行がおさまらぬ人等を見て、教會へ行くのがいやになつて、

終にはまるで行かぬ樣になりました。それは信者と云ふものは良い事をするものとのみ思つて居りましたからです。今の信仰の立場から考へれば、煩惱の人間ですから無理ない事と考へられますが、其頃は理想に頭が充ちて居る時ですから、非常に信者の不行績が不愉快になつてしまひました。其當時自分は吾が家が昔より衰へて來て、親戚等が甲府て歷々として人生上立派にして居るのを兩親が苦にして居るを見て、どふか女ながらも勉强して家をもとにかへしたい、と日夜考へて居りましたから、暇をおしんで讀書に耽りました。最早信仰を求めることは止めて、自分の勉强に勉めました。其內に學校を卒業しました。私は成績が良ければ直ぐに東京の高等師範へ撰拔になると思つて居りましたら、其年から一年奉職しなければならぬ事となりました。せめて此一年はまじめに奉職してと、每日一里餘りの野道を、來春東京にくるを樂しみつゝ、通勤して居りました。其小學校では校長も職員も女敎師としては非常によく待遇して吳れましたが、其內に他の學校の女敎師で、郡役所の郡書記の妻となつて居る人が、通勤の都合上訴なく私をだまして、他の學校に轉任させました。私は眞じめに職務を取つて居るのに、私情の爲めに轉任させられるは殘念と思つて、又敎へた生徒を眞に愛して敎へて居るは自分一人の樣な氣がしましたから、郡役所に行つて校長と共に郡視學にあつて賴みました。すると課長が出て來て、他の女敎師を壓迫する樣に、私をおどし付けますから、私は今で考へると恥かしくありますが、其時は頭が理にかつて居る時ですから、自分は生活の爲めに敎師して居るではないから、敎育上の爲めに轉任するならよいが、私情を以て轉任させ、迫や役所の威權で左右されるはいやてあるなどゝ、課長と論をし、學校へ出ませんでした。それから郡役所では七八回も私の宅へ手紙をよこしまして、私をなだめ樣としましたが、私は熟々敎育界がいやになつて、これから脫したいと思つて居りました。此話をきいて他の郡からも奉職をすゝめに來ましたから、話がむづかしくなつて來ました。其內に郡長から迎ひをよこして呼び出されましたから、郡長にいろ〳〵と話しました處、郡長が私の祖父の友達て、私の家をも知つて居りましたし、敎育に盡そふと思ふ心を知つて吳れましたから、郡長や校長の話て他の學校に行きました。其頃からは私は敎育界を去りたいと考へて、春休みをきりに東京の親戚へまゐりまして、高等師範へ行く望も止めてしまいました。東京には別に親しくして居る人はなけれど、一人幼なき時の知人がありましたから、其人に東京へむりに來た事を話し、學校をやめる手續きをたのみました。其內に私の家でも、甲府の家を人にかして、東京へくるやうになりました。私は社會へ出ると直ちに一つつまづき始めて、自分の思ふ樣にならぬ事を味ひ始めましたから、昔より力んだ力瘤が少しは取れ、女と云ふ事にも心付く樣になりました。其內に小澤の家に嫁入る事になりました。之れからは常に小澤が熱心に佛樣の御話をきかせて吳れましたが、其時はありがたく聽いて居りましたが、しみじみと佛の御慈悲に感じ入るやふな事はありませんでした。其內に子供はふゑる、姑は身體が御よわくなり、世事にあくせく暮す樣になりました。

かれこれして七年の歲月を積みます內一昨年の十一月に姑はなくなられて、世の無常を感じました。何かといそがしく暮す內、兼て舅の商の取引先の洋服やが不幸續きで困つて居るのに、里の實母から金をかさせて助けて遣りました。其內に其洋服屋はいろ〳〵借金が出て夜にげをしました。實母は、舅の取引先の人て少しも知らぬ人に金をかすは、舅が證人と思つたから貸したの故、舅からもらつて吳れと言はれる。舅は自分も取引の損も大きいに其上其金の辨償は困ると言はれる。どちらも親の事圓滿に行く樣にとて、自分が兼てより積みし子供の金を引出して、實母に拂ひし處、舅は孫の金を取るとは等惡く言はれる。母は舅を惡く言ふ。私が圓滿にと思つた事は少しも役には立たずなりました。或日實母に舅を惡く言ふのはよしてくれと賴みましたら、非常に母が怒つてひどい目にあひました。其時舅にも何かと言はれる。兩方から私はごた〳〵言はれ、惡く誤解される、又其他氣のくさくさする事許り重なり合ひました。昔とちがひ自分は責任ある身體故、每日腹が立つたとて怒つても居られず、人の妻人の母と考へて、怒りながらも心を取り直して暮して居ましたが、考へてくるとしみ〴〵と自分がつらく感じ、此のくるしい胸を誰れか同情してくれる人はないか、さりとて人樣にやたら御話するも身の恥と思つて、苦しく思つて每日送つて居りました。母の一周忌に先生に御出でを願ひまして一家の者だけて御法話にあづかりました上、私は苦しくて堪へられぬ此の胸の內を申上ました。眞に佛が同情して下さる方なればうれしいがと考へますが、佛のござるや否やをうたがひますから、どうしても苦しいと申上ますと、先生は今私が佛としてあなたの苦しみを同情して、かわいそうだと云ひましたら、あなたはうれしいと思ひますかと仰せられますから、私は私の如き親にも見離される如きあさましい身を、かわいそうだと眞に同情して下さる人があれば、其人にすがり付いて自分のつらい胸を訴へて見たい、と申しました。すると先生は今佛が私の口をもつてあなたの苦しみを同情下さると言はれたら、佛樣がありがたいでせう。實際佛は常にあなたに同情の涙をそゝぎ給ひ、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界は、よろづのこと空事たわごと誠ある事なきに、唯念佛のみぞまことにておはしますと仰せられ、常に私共を助けんとおぼし、永刧御苦勞下さると御話し下さいました。私は其處で考へる餘地もない爲めわからずにしまひましたが、先生は猶明後日九段の講話に御話下さると、御親切におつしやつて下さいまして御歸りになりました。後どうも先生の仰せられた事が、佛の化身て、かよう仰せられた心地がしまして、なりませんでした。主人が『懺悔錄』を讀む樣にと云はれ、拜讀しました。是迄二度位は讀みましたが、今日はいつもよりは非常に有がたく讀みました。それは『懺悔錄』の中の信仰を得たる人の實例と云ふ處て、敎科書事件で入獄せられた方の記事、王舍城の悲劇中、韋提夫人の記事、よく私の境遇に似て居りました。御本の三十七頁より三十九頁の處までは、最もありがたく讀ませて戴きました。其記事中「人は如何に苦しむとも、如何なる境遇にあるとも、それには構はずに、只滿身同情の涙を以て我身をながめ、我心の中の隅々までを能く知りぬいて、而も我等

の咎過を問ひ玉はず、只管憐れみ下さる眞實の朋友は唯佛陀ばかりである。吾等は此の佛陀の慈悲に縋り、救ひに預る外安心の道はない」とある處や「これは全體我々の目常が間違つて居つたからで、吾々は人間を力にすべきでない、我々の力となつて下さるものは佛陀計りである。」又「佛陀冥鑒の前には、實に仰山な罪を持つて居る。形の上では兎に角、精神上では正に罪の塊である。佛陀の前と思へば、とても無罪を云ひ張る勇氣はない。もう辯護もあつたものでない。又既に滿身同情の涙で眺めて下さる佛陀のまします以上は云々」と讀んで行く内に、全く自分は佛の前には大惡人大罪人、人をうらみ自分の事を罪なき者のやう考へて居た事が間違ひにて、こんな者故母にしかられても無理ない、人にいやがられても無理ない、あゝ今迄人をめあてにして居たからわるかつた、あじきなき無常の世に、此の罪深き此身を憐み下さるは佛樣一人きりと思ふたら、佛をうたがふ餘地はない、あゝありがたやと、佛の前にひれ伏して感謝せずには居られない。うれしありがたしに私は暫し感涙にむせびました。

猶思ひつゞけしに、このくるしい胸を同情下さるのみか、罪深きをあはれとおぼし、永刧より御導き下さるとて御苦勞下されし御親切、罪深き身も一念の念佛にて御助け下され、此世ながら救はれて淨土に往生させて戴くありがたさ。もうありがたくて、此世にて誰にも見はなされて、寄るべなき身を、御辛棒の強い、御慈悲の深い佛樣なればこそ、今日この身に御なさけを屆けて戴いたと歡喜せずには居られませんてした。猶阿闍世王の懺悔の記事中、九十一頁の三世を見通しゐます佛陀云々の記事、助けずには居られぬとの佛の悲願、如何にせつない、厚い、永らくの御辛棒强い御慈悲かと思ひ廻せば、實に御親切に何と感謝してよいやら御禮の言葉もなく、たゞ感謝の念佛を稱へて、歔涙にむせぶのみであります。翌日九段で先生に御目にかゝり、此の喜びを申上ました處、先生も非常にお喜び下さいました。かくて十一月廿八日、このうれしいありがたい年の報恩講に學舍へおまゐりしました處、先生から思ひがけなく告白せよと仰せられました。自分は感極まりし時なれば、有がた涙にむせびながら、前の告白を致しました。

其後の日ぐらしは、終日世事にあくせくと暮して居りますと、佛樣の事も忘れたやうに致しますが、何か事のあります時は、自分は何事も仕おふせぬ、又出來ない愚かな者、人と爭ふ處でないと、怒る心に念佛をとなへてありがたく思はせて戴き、かなしい時は此の憐れのかなしい者を、疾くより佛しろしめして、御憐み下さると念佛をしきりに稱へて、ありかたき心を相續させて頂いて居ります。其内に身體の具合が惡くなつて、此度は過てば死ぬかもしらぬと思ひました時、非常に心細く悲しくて堪りませんでした。あゝ今死ぬならば、今迄に親兄弟にもあゝもこうもと、いろ〳〵考へて殘念でたまらず、又わが儘な子供、なき後には如何など考へ出せば、とても居ても立つても居られず、身體がよれるやうになつて、聲を立てゝなきましたが、其時に御迎へがあれば、若き者でも、世の名殘惜しくとも行かねばならぬ無常の世、去年佛の御慈悲に感泣して、其後うれしく稱へし念佛も何とも言へぬ

かなしい淋しい心地になりましたが、あゝ何と思つても、して見ようなき、又自力で出來ぬ世、唯鴻大の御計ひにまかせて、親不孝も子の不憫も、許し給へ、み佛の御慈悲の中に成長せよと思つて、念佛をとなへて夜を明した事もありましたが、未だ命終らずして再び健康の身となりました。私は病氣中、いつも姑が産中はお腹が空くからと申して、柔かな粥をこしらへていつも下さつたが、其時はあだに過して居りましたが、此度の産に姑がなくなられて、粥が女中やたのんだ人てはうまく行かず、其他の事でも心づかいしました時、姑が御出たらばと、姑の深い屆いた御親切が、亡き後に非常に有難く感謝致しました。其亡母の三年忌に、先生の御舍弟樣や御信仰の深い方々が御集り下されし時、皆樣の御話を伺ひながら、今迄自分は佛が自分の愚かなる處、かなしい胸に同情下さる事の方が多く有難く戴いて居つたが、永い永刧萬刧の罪人を御方便して御苦勞下さつて居つたかを、常に皆樣より思ひ出し方が薄かつた。丁度亡母の御親切を後に思ひ出した樣て、何ともすまなかつた、有難い御慈悲と更に感じました。其後三十日に先生が御出て下さいまして、いろ〳〵信仰の御話下さいました。御話中吾々が御慈悲に氣がつかぬ、信仰の戴けぬは、上野へ行く道を取りちがへて、大塚の方面に行くを、佛が非常に憐れとおぼし、悲願をもつて道がちがふと仰せ下さるを、吾々がそれをきかぬと仰せられましたが、私はふと自分が佛の御親切を空にして、大塚方面の道を取りし事をあり〳〵とわからせて戴きました。それは學校に居る頃先生にかわいがつて頂き、友達に羨まれるがおそろしく、御親切を知りながら、之れをさけようとしました有樣が、丁度佛の御親切を空にして來たと似て居る樣に思はれて、何とも申わけなく、斯く淺ましき身をあきれずに、切ない御悲願を屆けて下さつた如來の鴻大の御恩の有難さ、此の鴻大なる御恩を御きかせにあづかりし善知識樣なる近角先生の永々の御哀れみ、御禮の言葉もありませぬ。

又思ひ出づれば、限りなき御慈悲にあづかりし事なども、なか〳〵拙なき筆に書き難う御座います。昨年先生が早稻田大學の敎友會の講演に御出向きの節、電車に御同乘仕りし時に、世に御信心に志す者多けれども、御慈悲を戴かる方は少ないと仰せられし、御言葉を思ひ出しても、かよう淺ましき罪業にのみ耽けれる身が、御慈悲に氣づかせて戴き、無常の世に御慈悲の中に日暮しさせて戴くは何とえがたい事やら、如來の御恩德を喜ぶばかりであります。母の亡くなられし以來、舅も商業上の不如意など加はり、是まで艱難せられし一代の事、全く行きつまり、此の世のあてにならぬ事をしみ〳〵感ぜられましたが、先生の「人生一轉」と題せられし御講話にて、非常に喜び、變つた人となり、御慈悲を喜んで居られます。先頃も孫が　明治天皇樣の「重荷ひく車の音ぞきこえける、照る日のあつさ堪へがたき日に」と云ふ御歌を節をあげてよんで居りました處、父は　陛下が車を引く如き下じもの者の上まで御思召す大御心は、丁度如來樣が吾等の如き者までやるせなく御思召し下さる御慈悲と同じことで、如來の御慈悲に心付くと、世の萬事萬端御慈悲より出てぬはないと喜ばれし等、深く御慈悲を喜んで居られます。一家の者が皆々御慈悲に引き入れて戴きし御恩を思へば、實に廣大な御不思議でございます。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

財布の底迄叩いて下さる御惠み

渡邊秀吉

此度び先生の仰せに從ひまして、喜んで玆に私の告白をさせて頂きます。此の話は十一月近角先生の御宅で、報恩講が御座いました時致しましたから、其節居合せの方々は御承知の事と存じますが、尙委しく申したいと思ひます。

私は丁度五年前の事でした、某銀行に奉職中罪を犯し、罰にふれまして、巣鴨監獄に收容されました。在獄中いろ〳〵と敎務長を初め、敎悔師の方々から如來の御慈悲の事につきまして御話を聞きました。それて出獄します頃には、大層らくになりまして、如來の御慈悲に氣が付いた積りでありました。が出獄して見ますと社會より排斥（此言葉は甚だ不適當で御座りますが、暫く斯樣に書かせて貰ひます）されまして、實に憤慨致しました。其結果滿洲に參りましたが、此所でも排斥され、遂に自分の居所がないように感じまして、新嘉坡に參りました。此所でも自分の思ふ通りには行かず、再び故鄕に歸りました。唯斯樣に申しますと、何でもないようですが、人から一言云はれると、自分が斯樣なる身の上であるから、態とあてつけに云ふたと思ひ、非常に猜疑心を起しました。また事實わざと云ふた事もあつたろうと思はれます。其都度自分は身のちぎれるような心地しまして、殘念なと思ひ、思ひ募ッた時には社會に對し反抗心を起して來ました。此反抗心と云ふのが再び犯罪する原動力かと思ひますから、餘事のようですが一寸申します。

さて社會より排斥されて見ますと、成程私は犯罪したから罰にふれたが、然らば排斥する社會の人々の內には疚しき人もあるではないかと思ふと、何やら社會の人々は無理である、自分が如何に思ふても駄目だ、社會が相手にして呉れぬと思ふと、自暴自棄な心が起り、どうでもなれと云ふ風になりました。是は社會の人々から見たら如何で御座いましょう、御批評を願ひます。

斯樣に一方には反抗心、他方にはどうしても社會に復活しようと云ふ煩悶とを持ちまして、鄕里に歸りました。そして反抗心、煩悶、其他種々な事どもの爲めに、遂に腦病に罹り、六ヶ月間爲す事もなく暮しました。

而して本年三月初旬診察を受ける爲め上京しました。然るに幸にも病氣快方に向ひ、今は其日〳〵をどうやら暮して居ります。上京しましてから近角先生にいろ〳〵と御厄介になり、御講話も時々拜聽致しましたが、如來樣の御慈悲に氣付かして頂く事が出來ませんでした。

然るに十一月二十二日、先生の御講話が九段說敎所にありましたから、拜聽して居りますと御講話の內に、先生のお子樣が胃を害せられたから、粥や重湯をあげますが、お子樣方は矢張り普通の御飯や菓子などを御望みになり、折角親が胃を害して居るから、菓子などは毒であるからとて、進める粥などはお好みにならぬ、實に親の心を知らぬ、又我々も同樣に如來の御慈悲に氣がつかずに、常に如來に背いて居るとの御話て御座いました。

そこて私の思出しましたのは、本年三月上京致します時、母は途中まて見送つて下されまして、壹圓五十五錢呉れました。私は兄などより旅費を貰ひましたから十分だと云ひましたが、强いて申されますから戴きました。其金を見ますと、五十錢銀貨三個、二錢銅貨二個と、一錢銅貨一個でありました。此銅貨まて下さるには、母は財布の底を拂つた事と思ひます。何と難有い事てはありませんか。普通の人て御座いましたら、一圓とか一圓五十錢とかて、決して端錢など下さる事はありますまい。そこが親なればこそ財布の底を叩いて、自分の不自由は何とも思はず惠ぐんて下さつたので御座います。私が犯罪の事を聞きました時には、母は腰を拔かしたと云ふ事であります。又私が滿洲より新嘉坡に參ります時には、遠方にやるのは心配だと云ふて、態々東京の姉の許まて詫に來られたと云ふ事てした。私は二十七歲の今日まて、親は難有いものだと思つて居りましたが、眞に親の御慈悲と云ふ事を氣付きませんてした。丁度粥がいやと仰つるお子樣と同樣て御座いました。何とも申樣のない不孝者てあります。是迄多少母に小遣錢を送りました事もありますが、それは皆自分の遣ひ殘り、時には道ならぬ事に遣ひました餘りてなくば送つた事はありません。それて自分は親思だと許り自認して居りました。何と云ふ心得違て御座いましよう、詫の致しようも御座いません。

斯樣に考へ、成程如來樣のやるせなき御慈悲に背き、常に〳〵强い御飯や菓子のみ欲しがつて居つたので御座います。如來樣は有難い〳〵とは思ふて居りましたが、それは遣ひ餘りの僅かばかりの小遣錢を送つて居つた難有味て御座いました。眞の御慈悲に氣が付いて見ますと頭が上りません。體裁も何も構はずに、財布の底迄叩いて下さる惠と比べようがありましようか。

さて斯樣に如來樣の御慈悲に氣を付かして頂きました今日になつて見ますと、是迄世の中を怨み、不滿て御座いましたが、斯く迄罪深き者、殊に法律上の罪まて犯したものを、社會は斯くまて寬大にして呉れたかと思ひますと、何とも今更申譯もありません。隨分私を怨むだ方もありましよう、憎く思ふた方もありましよう。どうぞ此告白によりまして御免し下さい。罪深ければ深き程可愛想に思召下さる如來樣の御慈悲と聞けば、我々には層一層の事と思ひ、感謝せずには居られません。無南阿彌陀佛〳〵。

求道日曜學校報恩講の歌

今日はうれしい報恩講
花やおかしに輝いて
みほとけ樣のおん前は
さながら淨土のお莊嚴

七百年のそのむかし
み親のみこと知らせんと
聖人さまはやるせなく
此にひがしに九十年

あるひは山に又は野に
わたくひとりをすくはんと
いくとし月の御苦勞は
長い憂きめをかけました

「如來大悲の恩德は
南無阿彌陀佛といざともに
身を粉にしても報ずべし」
み親の慈悲をたゝえませう

講義

歎異鈔

近角常觀

第十三章（承前）

「よきこゝろのおこるも宿業のもよほすゆへなり、惡事のおもはれせらるゝも惡業のはからふゆへなり、」前來縷述せしが如く、彌陀の本願の不思議に遇ひたてまつれば、如何なる不實と雖見捨てたまはざる如來の眞實にてましませば惡として如來の本願にたすけられざるものもなく、如何なる善と雖畢竟相對の善に過ぎざれば、如來絕對の大善の前には何等の加ふべき善もなし、されば我等の力としては一點の善も間に合はず、一點の惡と雖滅すべからず、唯本願を信じ奉れば善も惡も皆過去の業報の催す所にして、そらごと、たはごとまことあることなく、唯之をみすてたまはぬ不可思議の願海を信じたてまつるばかりである、世の信者が動もすれば此不思議を信ぜずして、唯强て善惡の業報まかせて安心せんと企つるゆへに、善惡業報が恰も運命論、宿命論の樣な心地になりて罪惡の自覺にならぬ樣になる、善惡の業報といふことは現在の苦樂を强て押しつける樣に考ふるは大なる誤である、押しつけても押しつけても押しつけられぬ現在の苦樂不平等に對して、初めて無限絕對の大慈大悲の不可思議を蒙りて、所謂善もほしからず、惡も恐れなしといふ、能令速滿足の身心俺足の心持になりたるとき、よきも、あしきも業報であると、手放しの出來た樂な心持である、隨て善といふも惡といふも、畢竟そらごと、たはごとゝ、罪惡たることの自覺出來た心持である、前記宗右衛門の話に殆んど言ふべからざる味の存するは、宗右衛門が如來の不思議に目が覺めて滿足の心持より着物を盜まれたりとて毫も惡として咎むる心なきのみならず、却て自己の前世の惡を懺悔し、利息を與へたりとて毫も善として矜る心なきのみならず、却て前世の恩を感謝する所に存するのである、此の如く、本願の不思議を信ずるものが一々善惡の宿業を心得る樣になつたることを忘れてはならぬ。

口傳鈔。曰、上人親鸞おほせにのたまはく、某はまたく善もほしからず、また惡もおそれなし、善のほしからざるは彌陀の本願を信受するにまされる善なきがゆゑに、惡のおそれなきといふは、彌陀の本願をさまたぐる惡なきかゆゑに、しかるに世のひとみなおもへらく、善根を具足せずんは、たとひ念佛すといふとも往生すべからずと、またたとひ念佛すといふとも惡業深重ならば往生すべからずと、このおもひともにはなはだしかるべからず、もし惡業をこゝろにまかせてとゞめ善根をおもひのまゝにそなへて生死を出離し、淨土に往生すべくはたゞあながちに本願を信知せずともなにの不足かあらん、そのこといづれもこゝろにまかせざるによりて、惡業をば、おそれながらすなはちおこし、善根をばあらませどもうることあたはざる凡夫なり、かゝるあさましき三毒具足の惡機として、われと出離にみちたえたる機を攝取したまはんための五刧思惟の本願なるがゆへに、たゞあふぎて佛智を信受するにしかず、しかるに善機の念佛するをば決定往生とおもひ、惡人の念佛するをば往生不定とうたがふ、本願の規模こゝに失し、自身の惡機たることをしらざるになる、

此口傳鈔善惡二業の事といふ章は、歎異鈔十三章と同意にして、覺如上人が如信上人より口傳の儘を書きたまひしものなれば、如信上人と同時に唯圓坊が聖人より承られたる此章と對照して、益々明瞭にいたゞくことが出來る、前にも屢言へる如く、延慶元年冬の頃、唯圓坊上洛の砌、覺如上人對面の上日來不審の法文に於て善惡二業を決し、あまたの問題をあげて、自他數遍の談におよんだとある己上は、實に此口傳鈔及び歎異鈔は、聖人より如信上人及び唯圓房の面授口決の奧義をつくしてあることをいたゞかねばならぬ、

此善惡業報の自覺を促す最要の點は、惡業をこゝろにまかせて止め、善根をば思の儘に具ふることの出來ぬといふ所が急所である、此事ばかりは實際人生問題の實驗より自覺するに非んば決して分かるものでない、この事は私が常に入信の經驗に於て述ぶることなれども、今亦其要點を告白せねばならぬ、私の出發點は我は佛を信ずるものなれば、佛の如く眞實に、佛の如く清淨に、佛の如く惡人を惡まず、俺まで愛せねばならぬと理想的に考へ、そして夫を努力實行した、其結果自分の善が目に付き、自分の効を認め、遂に他人の利己主義に目がつき、他の自己を理解せざることを不足に思ふ樣になつたのである、こゝに於て、從來理想として居つた、敵を愛するとか、身をすてゝ法の爲にするとかいふことの出來ない

ことが分かり、親じ來れば自分が犠牲になるとか、献身的に働くとか思ふて居つたことは、畢竟我を善とし、他を惡とする一種の虚榮心にすぎざることを覺り來りて、自ら我身が罪惡の塊たることを知ることが出來た、この時私がかく〳〵すればよいとか、又他人に隔心をもたねばよいとか云ふことは百も二百も承知なれども、自分の心が思ふ樣にいふことをきいて呉れぬ、即一分も一厘も善をなさんとすれども出來ず、惡を避けんとするも出來ぬ、今歎異鈔に「故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにゐるちりばかりもつくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき」とあるは、實に此一分一厘も自分の思ふ樣にならぬところを、如來の不思議によりてすくはれたる信仰の狀態を示されてある、

回顧すれば實に十八年前のことである、されど當時を想へば歷々見るが如き心地がする、俗に無名指を折るときは第二關節にのみ力が入りて、第一關節はフラ〳〵になりて力が入らぬ、之を辨慶の力泣といふことをきいた、實に我等が善惡の力は此の如きものであると感じたことである、善を爲さんとすれども出來ず、惡を避けんとするも避けられず、何共致方なき次第である、又夢に驚されたとき全身一分一厘動くことも出來ず、試に小指を動かさんとすれども毫髮も動かぬ、若し是が動くならば、夫を機會にはね起きんと欲するのである、我等が若し卯の毛羊の毛の先程でも、善を爲し、惡を避くることが出來るならば、斷惡修善を以て遂には成佛することも出來よう、しかるに我等が一厘の身動きのならぬことは、落雁の菓子を其を作る型にて押へつけた樣なものである、一厘の自由がきかぬのである、かくなる已上は誰か人ありて其小指の先までの微細な點まで理解して、徹頭徹尾同情を以て、かくまで罪惡の塊たる私を飽まで見捨てぬ清淨眞實の慈悲の塊がましまさずば安んずることが出來ぬ、かく押へつけられ、緊されたる身を自由にさるゝことは出來ぬ、然るに愈々時到りて如來の大悲が屆いて下されたときは、不思議なるかな、如何なる微細な點までも大悲の親心の徹到せざることなき樣になつた、是白雲青空の間まで身が擴がつた如く感じた次第である、即、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなしとの味である、若し此御不思議に接せずんば惡業をおそれながら犯し、善根をなしませども得るあたはざる次第である、しかるに此不思議に接すれば最早滿足であるゆへに、善もほしからず、惡もおそれなしてである、そこで此滿足の結果が卯の毛

羊の毛のさきにゐる塵ばかりも作る罪の宿業にあらざるとなし、との自覺を生ずるのである、即一分一厘の末に至るまで行き屆かぬことなき盡十方無碍光に照されて、初めて一分一厘の末まで無明罪惡の我身たることを自覺するのである、卯の毛羊の毛の先に居る塵といふは、微塵といふことの說明に俱舍論に、水をくゞる塵を七つよせて兎の毛のさきに居る塵となり、其塵を七つよせて羊の毛の先に居る塵となるといふ、聖人は常に十方微塵世界とか恒沙塵數の如來とか宣ふ、特に行卷には

言海者、從久遠已來轉凡聖所修雜修雜善川水、轉逆謗闡提恒沙無明海水、成本願大悲智慧眞實恒沙萬德大寶海水、喩之如海也、良知如經說言、煩惱氷解成功德水、

とある所は、實に聖人の實驗其儘を書き示して下されたのである、恒沙無明の海水を轉して恒沙萬德の大寶海水と成すと宣ふ、實に卯の毛羊の毛の先に居る塵ばかりまで一として罪ならざるはなく、其卯の毛羊の毛の先に居る塵ばかりの所までも到らざることなき盡十方無碍光の大悲大願の御惠たるとを御示し下さる、そこで實際一分一厘も動きのとれぬところを飽まで見捨てたまはぬ御慈悲を知らせんとて唯圓房に御諭しあらせられた剴切なる御教誨を、唯圓房自ら詳細に書き殘されたのが著しき次の一節である

またあるとき、唯圓房はわがいふことを信ずるかとおほせのさふらひしあひだ。さんさふらふとまうしさふらひしかば。さらばわがいはんことたがふまじきかと、かさねておほせのさふらひしあひだ。つゝしんで領狀まうしてさふらひしかば。たとへばひとを千人ころしてんや、しからば往生は一定すべしと、おほせのさふらひしとき、おほせにてはさふらへども、一人もこの身の器量にてはころしつべしともおぼえずさふらふとまうしてさふらひしかば。さては親鸞がいふことをたがふまじきとはいふぞと。これにてしるべし、なにごともこゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし、しかれども一人にてもころすべき業緣なきによりて害せざるなり、わがこゝろのよくてころさぬにはあらず、また害せしとおもふとも百人千人をころすこともあるべしと、おほせのさふらひしは、われらがこゝろのよきをばよしとおもひ、あしきことをばあしとおもひて、本願の不思議にてたすけたまふといふことを。しらざることを、おほせのさふらひし

なり。

聖人と唯圓房との御對話の樣子が躍如として見るが如くである、抑々此御對話の主意は如何に惡を爲さんとするも惡業なければ爲すあたはず、惡を止めんとするも惡業あれば止むるあたはずといふことを、實地に知らしむるためである、故に聖人が先づ二度までも念を入れて我命に違はぬかとたしかめたまひたるは、畢竟我等が思ふが如く實行するつもりで居るも、不可能であることを知らせんが爲に、先づクドク〱聖人の嚴命恩命には服從恭承するといふ決心を確かめたまひたものである、始めて此章を見るときは、なんとやらん不可能なる難題をもちかけて、唯圓房の口を閉ぢしめたる詭辯の如く、串戯の如く、極端なる作りごとの樣に見えるのである、是矢張畢竟自分等の心だけの不眞面目なる見方である、つく〱考ふるに聖人は頗る眞面目に對話された、ソクラテスの弟子を諭すが如く、中心よりナルホドと合點する樣に懇切に示されたのである、先づ始に、またあるとき唯圓房はわがいふことを信ずかと仰せられた、是はたゞ戯れに仰せられたのではない、御一代聞書にある如く、弟子として善知識の仰せなれば、何事でも出來ぬといふことはない、たとひ近江の湖を一人してうめよと仰せられてもかしこまりたと申すとある如く、唯圓房も聖人の仰せとあれば、如何なることでもかしこまり候といふ意で、さんさふらふと申したのである、スルト聖人はまた念を入れて、さらばわがいはんことたがふまじきかと重ねて仰せられた、全體是は信仰の上より、聖人の仰せなれば何事でも致しますといふ深き決心を以て答へて居るのである、然るに夫に對して猶其意思を確めて、聖人の命ならば秋毫も違はぬといふ氣にならしめたまひたのである、夫故つゝしんで領狀まうして候と、唯圓房もキッパリと決答をしたのである、ツク〱考ふるに唯圓房は聖人の仰せに信順する意味で答へつゝある間に、聖人は律法的に服從的に話しかけられる所が面白い、始はわがいふことを信ずるかと話しかけ、次にはわがいはんことたがふまじきかと盲滅法に仰せられたが、モト〱聖人の仰とあれば、信順、隨順いたしますといふ心持にてつゝしみて領狀したのである、然るに思ひ掛けもなく、聖人の仰としては意外にも、たとへばひとを千人ころしてんや、然らば往生は一定すべしと律法的に仰せられたものゆゑ、所謂律法的に服從從順たること出來ぬゆゑ、仰せにては候へども一人も此身の器量にてはころしつべしとも覺えず候と御返答申

し上げたのである、併聖人はたしかに唯圓房が聖人の御命に信順信服して、所謂、たとひ法然上人すかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候底の心狀になりて居ることを御承知の上、且つ度々念を入れて、聖人の仰とあれば毫髮も違はぬといふ心を十分たしかめおかれたものゆゑ、汝は口先ばかりではない、中心より我命には一切違變せぬつもりで、現に今が今親鸞がいふことを違はぬといふた舌の根の乾かぬのではないか、是にてもしるべし、何事でも自分の思ふが儘に自由に爲さんと企てる通りに出來るものなれば、我命に信順信服せる上からは、往生のために千人殺せと言はゞ殺すこと出來る筈である、しかるに汝は如何に親鸞の命に服從せんとするも、一人にても殺すべき業緣なきによりて殺すとが出來ぬのである、汝が善人であるゆゑに殺さぬのではないぞ、其代りに殺さぬつもりで居ても百人千人を殺す樣なとがないとも限らぬとの教誨である、即ち唯圓房が聖人の仰せに信順信服して、毫髮も違はぬつもりで居るなれども、律法的の仰を受くるときは、如何に服從せんと思へども自己として自分の心を自由にすることが出來ぬのである、何事もこゝろにまかせて出來ると思ふのが間違である、口傳抄に「惡業をこゝろにまかせて止め、善根をおもひのまゝにそなへて生死を出離し、淨土に往生すべくは、あながちに本願を信知せずともなにの不足かあらん」とある如く、決して人を殺さんと思へども殺すことか出來ず、殺さぬつもりでも人を殺すことがある如く、善を爲さんとすれども善を爲す能はず、惡を止めんとすれども止むるあたはず、是皆業報なり、善を爲せりといへども我善人なりとて矜るべからず、惡を爲せりといへども我惡人なりとて逃るべからず、此の如く我等が一分一厘動きのつかぬ有樣をしろしめして、徹頭徹尾見捨てたまはぬ大悲大願の不思議は、恰かも煩惱の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如き我等に對して、やるせなき思召を以て苦行したまふこと、亦實に狂亂所爲多きが如くまします、盡十方無碍の御惠なれば、前に言へるが如く、一分一厘動けぬ私が、全く本願の不思議にたすけられて、圓融圓滿頓極頓速に、一念のたちどころに不斷煩惱得涅槃の自由の身とせらるゝのである、されど我が心の善きを善しと思ふべからず、善きも惡しきも見捨てたまはぬ本願の不思議にましますを、信じたてまつるばかりである。

但聖人が唯圓坊に對して、例ひ假設とは云ひながら、人を千人殺してんや、しからば往生は一定すべしといふことを申されたのは、全く架空の思附てはない。昔鴦崛摩と云ふ大惡賊あつて、人民を殺害し、各一指を取りて華鬘を作るが故に名づけて鴦崛摩といひ、譯して指鬘と云ふ。此惡賊は千人人を殺せば、悟りを得ると云ふ迷信を懐きて街頭に立ちて往來の人を殺した。然るに九百九十九人を殺して今一人て千人となると云ふ時に恰かも佛が來られた、鴦崛摩は是を殺さんと欲して後を追けて行つた處が、佛は足が早くして及ぶことが出來ぬ、そこて鴦崛摩、佛に曰く、沙門且く止れ、佛逆賊に曰く、我止まること其日久し、只汝未だ止らざるなり、鴦崛摩忽ち改悟し佛弟子となつた、と云ふ事實がある、今聖人は此事實を借り來りて唯圓坊に示れたものである、而して此事は天台に於て、引合に出る事て、玄義に如來洞達して十法の底を極め十方の遍を盡し、衆生の種と非種と芽と未芽と、熟と不熟と、可度脱と不可度脱とを識り、實の如く是を知りて錯謬あることなし、鴦崛摩羅は是惡人なりと雖も、善の性相熟して、即時に度を得、四禪の比尼は是善人なりと雖、惡の性相熟すれば度するに堪へず、當に知るべし、衆生の法不可思議なり云々とある。如此き人を千人殺す様な惡人なれども如來洞達の御力によりて、因緣熟すれば度脱すると云ふことなり、今聖人も宿業によりて例ひ千人殺す者と雖、彌陀の本願不思議によりて、助けたまふと云ふことを、知らされたのである。なほ、鴦崛摩經に說きある處を調べてみると、一層面白き事實を發見する、全體鴦崛摩は本來の惡賊てはないのである、もと舍衛城に異梵志ありて、博學老儒にして、門徒濟々五百人あり、其上首の弟子が彼てある、彼は非常に聰慧敏達にして師の尤も愛する處てあつた、然るに師の室に誘惑されて、是に從はざりし故、室は却りて彼の爲に辱を受けたりとて師に讒言した、そこて師匠は大に怒り普通に彼を罰したのでは、ものたらぬ様に考へ、即ち謀を設けて曰く、汝の學、堂に昇り室に入り只一藝未だ足らざるものあり、汝宜ろしく利劒を執りて、四衢に於て自ら百人を殺し、人毎に一指を執りて飾りとなし日中に到るまで百指を滿しむる様に遵奉すれば道德備はる者と云ふべし、と敎へて彼を地獄に墮さしめんとした、然るに彼は涙を垂れ、其言の如く實行したと云ふのである、故に鴦崛摩は他人より千人殺せと云はれて、是を實行した人間である、又同經に日中間近くなりて百人目に彼の母が來たとある、そこ

が彼は母を害して其數に滿たしめんとしたのてある。佛これをみそなはして、若し母を害せば罪救ふべからざるを以て、便ち忽然として其前に立ち給へり、即ちそこて佛を殺さんとしたとある。實に母を害し又佛を害せんとしたる大逆罪を極めたる人てある。而して又同經に彼が佛弟子となつた後、女人の臨月に於て難產にして救護を要するとき、佛は彼を遣して我未だ生れてより殺生せず、故に汝當に安穩に患なかるべしと云へといはれた、然るに彼佛に曰く、我衆罪を作りて稱計すべからず、九十九人を殺して一百に滿たず而して此言葉を發するは豈兩舌に非ずや、佛告げて曰く、前生、世を異にし今生同じからずと云はれた、即ち罪が皆滅したといふ意味てある。其後彼は舍衛城に入りた處群小童が或は瓦石を以て擲ち或は矢を以て射、或は刀を以て斫り、或は杖を以て擊ち、頭を破り、體を傷け、衣服破裂せられた。されども佛前に歸り來りて、懺悔して毫も恨む事がなかつたとある、是等の事實を味ひ來れば、かくまて逆惡を極めたる、彼も如來の御救にあひて、其罪惡を懺悔し所謂地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ底の信念があらはれたのてある。是を以てみても聖人の說きたまひし本願の不思議と云ふことは實に釋尊の眞髓を鍾めたまひたものと仰ぐべきてある。

然れども、此章に現はれたる本願の不思議は我等が如何なる宿業をも知ろしめし、煩惱具足の我等を救ひたまふと云ふことは、聖人が信卷終りに長々と引用したまひし涅槃經の阿闍世王入信の文より、來りたるのてある。抑々阿闍世王が父王を殺して後、慚愧心を生じ、大煩悶に陷りし時、六師外道が種々の說を以て阿闍世王を慰めんとせしかど、畢竟斷、常の二見に墮して、何等の救濟の效もなかつた。然るに佛は王の爲に飽まて前生の宿業を說き且つ其罪業に向つて、御身に引き受けて救濟を說かれた、即ち「王若し罪を得ば諸佛世尊も亦罪を得たまふべし、何を以ての故に汝が父先王頻婆沙羅、常に諸佛に於て諸善根を植ゑたりき、此故に今日王の位に居するを得たり、諸佛若し其供養を受けざらましかば、王たらざらまし、若王たらざらましかば汝則ち國の爲に害を生ずることを得ざらまし、若し汝父を殺して罪あるべくば、我等諸佛も亦當に罪あるべし。若し諸佛世尊罪を得たまふ事なくんば汝獨如何んぞ罪を得んや」と宣ふは畢竟我等の業報を引受けたまひて、苦を同ふし、飽まで救はずんば止まぬと云ふ若不生者不取正覺の本願不思議の御味である。

猶進みて衆生の四種の狂惑に對して佛は戒を犯せりと記したまはず、皆是狂亂の所爲にして本心に非ざることを知りたまへばなり、そこで涅槃經には、種々例を說き「大王例へば山谷の響の如し、愚痴の人は是を實の聲とおもへれり有智の人は其眞に非らざるを知ろしめせり、殺も亦如此し、諸凡夫は實とおもへり、諸佛世尊は其眞に非ずと知ろしめせり、乃至、大王殺業、殺因、殺果及び解脱我皆是を了れり、即ち罪あることなし、王殺を知ると雖如何んが罪あらんや」、と反覆丁寧に佛は我等が殺は皆狂亂の所爲にして眞に非らざることを知ろしめし給ふと、大慈大悲到らざる處なしてある。是れ實に我等が宿業を飽まてしろしめして、見捨てたまはざる本願不思議の極である、最後に「大王譬へば涅槃は有に非ず、無に非ずして、而も亦是有なるが如し、殺も亦如此し、非有非無にして亦是有なりと雖云々」と說かるゝに到りては、煩惱菩提體無二の救濟の極を說かれたものである。

畢竟するに爲阿闍世王不入涅槃の一語に於て含まれたる、甚深秘密の善巧句義が聖人罪惡救濟の德音の源泉にして歎異鈔第九章と云ひ、又此十三章と云ひ、皆是より流れ出てあるのである。即ち爲と云ふは一切の凡夫、又一切有爲の衆生又佛性を見ざる衆生なり、而て阿闍世王とは普く一切五逆を作る者即ち是煩惱具足する者即ち是一切未だ阿耨多羅三藐三菩提心を發せざるものなり。如此く佛かねてしろしめして煩惱具足の我等、善惡業報の我等を憐み給ふ本願の不思議である、又爲とは佛性にして阿闍世とは不生即ち涅槃である。是本願の不思議によりて生死涅槃の境に到らしめ給ふのである。故に爲阿闍世王不入涅槃と云ふことば煩惱具足の我等を、かねてしろしめして煩惱を斷ぜずして涅槃に到らしめ給ふ、本願の不思議である。よつて其結文に曰く「如來密語は不可思議なり佛法衆僧亦不可思議なり、菩薩摩阿薩も亦不可思議なり、大涅槃經亦不可思議なり」、と、是「彌陀の本願不思議におはしませばとて惡をおそれざる」大德音の淵源である。

◉求道日曜學校

多くの御喜びの方の告白に見ても、幼時に於て御慈悲に御緣づけられて居る事が、如何に有難い事であるかゞ繰反された話題であつたが、今度不思議にも二三家庭の要求と、四五の同志の發起とが、期せずして一致し、學舍に於ても近角指導の下に日曜學校を開催させて貰ふ事になり、十一月十五日日曜を以て其第一回を開かして貰ひました。佛教に於ても此種の企ては、既に相當の經驗を積まれて居ることであるが、我等に於ても何處迄やらせて貰へるか、各自の喜びを中心として、總て注入的なるは之をさけ、飽迄兒童の至純なる性情を[illegible]宣して、たのしく、而も根底的に佛種を開發させて頂き度いと、カードの如きも毎週同人相寄つて教材に應じて研究し、相應の苦心はさせて貰つて行き度いと期して居る次第である。開會以來未だ五回に過ぎないが、回毎に多少の光明を認めさせて頂けるは、同人のふかく感謝して居る處であります。猶ほ本年は月の廿日を以て兒童の報恩講をつとめさせて貰ひ、以て本年の終會とし、新春は列々三日の日曜より開校のつもりである。時間はいつも午後一時半よりでありますから、希望の方々には年齢に頓着なく、御出席なして下さるやう望みます。

講話

唯觀念佛衆生攝取不捨

唯觀念佛衆生の文と『歎異鈔』の第一章

一 善導大師の『往生禮讃』の文に、

唯念佛の衆生を觀はして、攝取して捨てず、故に阿彌陀と名く、

といふお言葉がある。此の語は意味深くして、多年拜讀の『歎異鈔』第一章の

彌陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

の文は、殆んど此の語がもとになりて仰せられたか、といふ程に伺はれるのである。又夫れから氣がつくと、嘗て京都に於て親鸞聖人及び歷代の法主等の眞筆を蒐めて、集覧會といふが開かれた中に、如信上人の眞筆といふのがあつて、夫れが矢張り「唯觀念佛衆生攝取不捨、故名阿彌陀」の文が書いてある。之等から言ふても『歎異鈔』一章のお言葉が、彌々之である事を思ふのであります。

二 斯く言ふと何やら『歎異鈔』が如信上人の作に近かくなるやうであるけれども、『歎異鈔』は先師口傳て、如信上人の仰せを唯圓房が書いたのである。即ち如信上人が常に仰せの親鸞聖人仰せの趣きを、唯圓房が聞きことゝと考へて、上人の歿後に書き誌したのであるから、如信上人の日頃のお言葉が『歎異鈔』の初めに出て來るは更に不思議は無い。即ち如信上人の常に仰せのお言葉が『歎異鈔』の初めにあるからとて、如信上人の作とはならぬのである。

『歎異鈔』の作者について

三 餘事ながら申しますに、私は地方に出て居る間は人に話す方が先きになつて、自から考へることは少いのである。夫れが東京に歸ると、朝夕矢張り話し仕ながらも、朝など久しく佛前で『歎異鈔』其の他のお聖教を拜讀さして貰ふにつけ、日頃から思ふてることを、又繰反し〳〵味はして貰ふことが多いのである。こはもとより皆樣が安心を求めらるゝ上に必要のことでは無けれども、私の如く斯く朝夕『歎異鈔』の味ひを、自分にも頂き人にも話すとなると、『歎異鈔』は誰が書かれたといふことが、常に頭にのぼつて來るのである。昔から如信上人の作と言ふてるのであるけれども、何うも唯圓房らしいと私は思ふてるのである。併し唯圓房が書いたとなるため如信上人と無關係になるのでは無くして、如信上人の歿後如信上人の日比の仰せを追懷し、唯圓がかき遺したのであらう、とのことは常に度び〳〵申して居る通りであります。

四 之れを皆樣にする時は、夫れが誰であらうと大した變りでもありますまいけれど、私としては切りなく考へ〳〵の出て來る問題なのである。て先日も隙に任かせて考へ〳〵仕てる中に、又一つ妙なことに氣がついたのである。入らざること

のやうなれども、『歎異鈔』の初めに、

竊に愚案を廻らして粗古今を勘ふるに、先師口傳之眞信に異るを歎き、後學相續の疑惑有ることを思ふ。幸に有緣の知識に依らずんば、爭でか易行の一門に入ることを得んや。全く自見の覺悟を以て他力の宗旨を亂ること莫れ。云云。

これについて考へついたのであります。

五　私が抑々初めて『歎異鈔』を讀んだ時、――人間は妙な者で、ものに慣れると何ともなくなるのであるけれども、私が初めて、――いつか覺えて居ぬけれども初めて讀だ時、斯ういふことを思ふたのである。「竊に愚案を廻らして……疑惑有ることを思ふ。幸に有緣の智識に依らずんば云云」――すると有緣の知識とは誰だらう、とのことを思ふたのである。茲の口振りで見ると、俺が言はんと分らぬと言はんばかりの語氣である、すると俺が有緣の知識との意味であらうか。すると有緣の知識に依らぬと分らぬから、俺が斯く書き註すとなつて、頗るをかしい。すると矢張り親鸞聖人のことであらうか、聖人にしてはかき方が少し物足らぬ。併し今でこそ聖人を祖師とも開山とも仰いでこそ居れ、當時にありては有緣の智識位ゐに思ふたのでもあつたので有らうか。といふやうな具合になつて、幾年前であつたか初めて讀んだ時、齒の拔けたやうにて茲の處が如何にしても旨く讀みがつかぬ。と然う思ひつゝも其中讀みなれて、さら／＼讀み過して居つたのである。

六　で私は今度ひよつくり此の事を思ひ出したのである。「成る程幾年前か初めて讀んだ時も、親鸞聖人と作者との間に、今一人誰か無ければならぬと思うたのであつたが、夫れがとうど分つて來た。初めて讀んだ時既に其の考は出てたのであるが、其中讀み慣れて聖人の事とばかり久しく思ふて居た。成る程今考へると、有緣の知識は如信上人である」と、ふと此間思ひ出して來たのであります。

七　一體斯く私が度々此の問題を持ち出して言ふ所以のものは、私は疾くから作者は唯圓であるとの考を持つて居るのである。如信上人の歿後に、唯圓が東國の信仰界の亂れて來るを歎いて書いたもので、故に唯圓より如信上人を先師といひ、從つて有緣の知識は如信上人であると思ふて居つたのである。けれども世の中一般に如信上人の作となつて居るもの故、然う言ひつゝも私は氣に懸る。如信上人より聖人を先師と呼び、又有緣の知識と言ひなされたとすれば、夫れにしても惡くない。唯圓から言ふたとすればをかしきも、如信上人が言はれたとすれば夫れでもよいとも思うて居たのである。處が今度以上によりて、彌々聖人と作者との間に、如信上人が這入てあることを明に感じたのであります。

八　も一つは私が之に氣のついた時、如信上人が聖人の事を先師と言はれたとすれば、もつと中の聖人々々とある處を、先師々々と仰しやらなければならぬ筈だ。處が先師なるお言葉は今の初めの處と第十二章に在る丈けで、あとは皆な聖人々々と言はれてある。すれば明に中に如信上人なる方が這入つて居て、夫を崇めて先師と言うたものに違ひないと又近頃熟々味はして貰うて居る事であるのである。外にもまだあるが、兎に角「唯觀念佛衆生云云」の文は、如信上人自ら書かれた御眞筆もあり、又『歎異鈔』一章のお言葉は、此語から出たに外あるまいと思ひ、其とを申さうと仕た譯けなのであります。

佛とは如何、如來とは如何

九　さて初めにかへつて「唯觀念佛衆生攝取不捨、故名阿彌陀」――こは既に『和讃』にも之て作らせられてある。

十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし、
攝取してすてざれば、　阿彌陀と名けたてまつる。

阿彌陀佛と申すは、最早や斯ういふお方といふより外に言葉は無いのである。

一〇　そこで此頃私は熟々思はして頂くに、「佛とは如何」「如來とは如何」此の尋ねは茲へ訪ねて來て下さる方の、皆な眞最初に言はれる言葉なのである。處が殆めて聞きに來らるゝ方の尋ねも之であるが、先般或有難い方が信仰上十年廿年の苦心して、遂に夫れが駄目になりて來て下さた時も、矢張り「甚だ幼稚な尋ねてあるが、佛とは何うか」といふ問題を仰しやつたのである。すると一番初めての人の問題も之であるが、十年廿年の苦心をした方の問題も結局之である。するとこは信仰上一番最初の尋ねであつて、又最終の尋ねである。こは信仰として最も有難いとこであつて、初めて聞く小供の尋ねも之であれば、聞いて／＼聞拔いた最後にもう仕やうがなくなつて出る尋ねも之である。すると「唯觀念佛衆生攝取不捨故名阿彌陀」なることは、初めも終りも無い。もう之さへ分つたら信仰といふ事に決着するのであります。

一一　此間も或方は「話をきいて喜んで、家に歸つて頻りに喜んでる最中に、待て！といふ考が一つ出て來ると、もう駄目になる」といふとを仰しやつた。此の「待て！」といふ奴が、「お前は喜んでるが本當か、一體何を喜んでるのだ」といふ奴である。之が出て來るといふは、即ち佛が分つて居ぬからである。又或人は「先生の喜んで居らるゝが本當ならばよけれども、本當でないとすると、一念之がてゝ來ると、夫れ迄喜んで居たのが全然不可ぬやうになる」と言はれた。「するとこんなことでは、單に心に然う描いて喜んで居たに過ぎぬでは無いか、之は何うした譯けて有らう」と、そんな自問自答が出て來るからが、はや佛が頂けて居ないからである。

一二　そこで昔から言ふことであるが、「饅頭がうまいのか舌がうまいか」といふ話がある。どちらがうまいのか知らぬが喰つて見てうまいからうまいといふより仕やうが無い。「唯觀念佛衆生攝取不捨、故名阿彌陀」なる味ひは此の外に無いのである。饅頭は何か知らぬがうまいからうまい、夫れが主觀主義か何か知らぬが、喰べてうまいからうまいといふ外に言ひやうは無いのであります。

如來は實相身なり、爲物身ねり

一三　そこで昔から曇鸞大師の言葉に、如實修行相應、名義相應とあるのは、之を仰せられたのである、一休禪師の話に、一休上人が京都の五條の橋の畔にくねつた松が一本有つた、之に札を立てて此の松を眞直ぐに見た者には褒美をやると言はれたら、或奴が飛んで行き「私は眞直ぐに見ました。曲つた松を曲つたと見たから、眞直ぐに見たのだ」と言つたら、「貴樣大方道如に敎はつて來たのだらう」と、言はれたといふ話があるが、如實修行相應は、即ち其の如く、曲つたものを曲つたと、實の如く取つたが如實修行相應である。佛の有難いは、有難いことを頂いたのだから即ち有難い、といふ以上に最早や仕方がない。すると此の有難い仰せを有難いと如實に頂く味ひを仰せられたが、如實修行相應のお言葉なのである。又名義相應は、佛の名義は「唯念佛の衆生を觀はして攝取して捨てず、故に阿彌陀と名く」この佛の名義を名義通りに

頂いたが名義相應である。すると曇鸞大師の如實修行名義相應の仰せも、畢竟は玆のことに外ならぬのである。

一四　猶ほ其上曇鸞大師は如來の事を書くに、「如來はこれ實相身なり、爲物身なり」とのお言葉を仰せられてある。何うかと言ふに、如來は廣大なる一如法界の境界より、我々仕て見やうなきを哀はれみ救はんが爲めに、態々現はれて下された、我々を濟度の爲めのお姿とのことが、「實相身なり、爲物身なり」とのことなのである。すると我々最早や如來は宇宙と何うぢやの、實在と何うぢやのと、そんなことと云ふには當らぬ。如來は思ひがけなく我々仕て見やうなき者を、若し生れずば正覺を取らぬと、我々を救ひの爲めの實相身、爲物身と、此の以上に何程考へても言ひやうはないのである。總て斯く漢文で書いた御言葉であると、私共日頃親しみ難い爲めよく味はぬ弊があるが、頂き來ると皆な一々信仰の有り切りを言ひ置いて下さるのである。

一五　又假名のお聖敎になると、今度は反對におろそかに見てよく味はぬ弊がある。蓮如上人の『御文』の如きでも、あゝ南無阿彌陀の講釋かと、初めから馬鹿に仕て居る。が其の『御文』の上の南無阿彌陀佛のお示しも、要するに南無阿彌陀佛が眞の佛のお姿であるといふことゝ、又南無阿彌陀佛が我々の頂きた樣であるといふ此の外に無いのである。すると我々の頂く處は、何と言うても最早や佛とは、飽く迄私を捨てぬ慈悲のお方とより外に云ひやうは無いのであります。

一六　又之を『正信偈』の御敎化で頂いても、先づ初めに

無量壽如來に歸命し、不可思議光に南無したてまつる。

と、初めに佛名を呼びあげさせられて、次に

法藏菩薩因位の時、世自在王佛の所に在りて、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を覩見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發せり。五劫に之を思惟し攝受す。重ねて誓ふらくは名聲十方に聞えん。普ねく無量、無邊光、無礙、無對光、炎王、清淨、歡喜、智慧光、不斷、難思、無稱光、超日月光を放ちて塵刹を照らす。一切の群生光照を蒙る。

と口を極めて佛德を讃歎し、如來は斯くお見捨て無き大慈悲より現はさせられた無碍光にましまし、清淨、歡喜、智慧光にましますとお喜びなされたも、極まる處は「如來はこれ實相身なり、爲物身なり」との事に外ないのである。すると最早や何れより頂いても、「唯觀念佛衆生攝取不捨、故名阿彌陀」とより外はない。處が之が本當に頂けたのでなくして、唯理窟の上より味はふてるのであると、「佛とは何か、我々を助けて下さる方である。」『其佛は何うして下さるのか、我々を助けて下さるのだ」といふ具合になりて、どこ迄もぐる〳〵廻はりて切りがつかぬのである。

一七　そこで彌々の信仰の味ひはと云ふと、

親鸞におきては、唯念佛して彌陀に助けらるべしと、よき人の仰せをかうふりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。

もう此の喰べた味ひの外に無いのであります。唯きめ込んで居る丈けであると、何程喜んで居つても、途中で「一體その佛は何處に在る」といふやうな考が俄に持上て來る。それは即ち實際に喰つたのでないからである。實際に喰つたらうまいといふのになると、併しそれは本物かと念押されたにしてからが、本物で有つても無くても喰つてうまい以上は、うまいといふほか無いのである。設ひ、「そんな事言うたとて、實際極樂にゆくのか、地獄にゆく種かわからぬぢや無いか」と言はれたとしても、たとへ然うでも、此の實際にうまい、此のものゝ外にうまいものは無いのである。そこの味ひが即ち「唯觀念衆生攝取不捨、故名阿彌陀」と、——此の外に如來も佛も無いのであります。（講話摘錄）

時報

求道講話概況

第一求道會土曜講話　（聽講乙記）

九月二十六日。「横超の信」と題して説かる。横超と言ふ言葉は親鸞聖人が眞實の絶對他力の敎を示された言葉であつて信仰上味が深い。横は竪に對し、超は出ると云ふ言葉に對して用ふ。我等が現在の世にて行を正しくして直ぐに證ると云ふ自力修業が竪である。自分以外に佛ありと認めその佛の力にて彼の淨土に參るといふ他力が即ち横である。出は漸々修養し證るのであるが、超は頓に證りの境界に行くことなり。そこで御開山は信仰を分つて竪出、竪超と横出、横超の四つにされてある。他力中でも漸々修養的に行くと考ふるが横出である。御慈悲を聞くにもよく聞かねばならぬげれど漸々頂く樣に思ふならば間違ひであつて一念に頂くのである。是が横超である。證る心の狀態で喩へたものであつて横といふのが既に普通の調子でない。竪に漸々行くのでなく横に飛び超えるのである。一足飛びに敎はれるのである。この言葉は善導大師の「横に四流を超斷せよ」といふお言葉から出たのである。人生上に種々苦しむ處の流を飛び超える處がなければならぬ。お慈悲によりて人生の苦しみがぽんと斷れた味が無ければならぬ。然るに他力信仰の上にはまた不斷煩惱得涅槃といふ言葉もありて煩惱を斷たぬともある。即ち兩方面がある處に言ふに言はれぬ味がある。人生には諸の惱み苦しみがある。不斷煩惱とは吾々は自分で煩惱は止まんものであるぞと言ふことである。斯る者に對して佛は如何に思召し下さるかといふお心を聞かねばならぬ。彌陀の本願を説くに我超世の願を建つとか無上殊勝の願を超發すとか言ふてある。あたりまへなら超世とか超發とか言ふことはない。普通の敎からは善いことをなすれば善くなり、惡いことをすれば惡くなる。故に飽くまで善くしなければならぬ。然るに思ふ樣に善いことが出來ず、惡い心が起つて煩惱の流を拔けられぬ。處が斯く善く出來ぬものを見捨てないと云ふ思召が超世の本願である。佛が當然助けて下さる樣に思つて居ると人生問題でやつぱりこれではいかぬと五分〳〵の思が止まぬ。吾々の五分〳〵な處を哀れと思召し、五分〳〵の生活から遁れられぬ處を横から打切つて下さるのである。その遁る瀨無いお慈悲を聞くから、それが徹する處で超絶して歩ることを得て安樂國に往生せんと頂ける。そうして横に五惡趣を截り惡趣自然に閉づる。自分としてはどうしても煩惱を無くし得ざるものが遁る瀨無いお慈悲で斷ち切れるのである。云々。

十月三日。『動亂と救濟』吾々の心は常に二つの方向を取つて居る。一づは自分の欲する樣、仕度い方に向て行くと云ふ心と、一つは思ふ樣に仕樣と云ふのは勝手であるから惡い心を止めて立派になつて行こうと云ふ二つの考が戰つて居る。歎異鈔にも「信心の行者自然にはらをもたてあしざまなることをもをかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしてはかならず廻心すべしといふこと」云々。とあり、一方には自然のなす處だから仕方がないと云ふ二つの考が現はれてある。此の二つの考がたび〳〵して信仰が頂けない。斯く吾々の心は種々の考を以てかき亂され動亂するのである。何時までたつても心が亂れて仕方がなく又た淺間しくてもよいと云ふ樣なことでは安心出來ぬ。吾々の心が動亂してならぬから、しつかりした信仰を得度いと思ふのである。其處で救ひが來るのである。如來のお心は斯く動亂絶へず、惱みの止まぬのを哀れと思召し、まことならぬ吾々を見捨てられぬと云ふのが如來の廣大なお誠である。不實なものが見捨てられぬと云ふ御眞實一つが頂く處である。然るに御信心を頂こう〳〵と云ふ思ひの有る間は他力の信心は得られない。他力とは不實な者を見捨てられぬと云ふ如來のお慈悲である。信心を得るか得ぬかなど云ふことではない。不實な者が見捨てられぬと云ふ眞心を以て向はれるから、日頃本願他力眞宗を知らざるものも彌陀の知慧をたまはりて本願を頼みまゐらするのである。不實て向つて居たものが向ふの眞實にとう〳〵頭が下つたのである。此の遁る瀨ないお慈悲を頂いて見れば淺間しい方に追從して行けなくなる。人生吾々が絶へず煩惱に亂される中に佛の遁る瀨ないお心で救はれるのである。云々。

十月十日。「攝取不捨の意義」先生は前の日曜の夜出立、故鄕にて報恩講を勤められ今日歸京せらる。『觀無量壽經』に「光明あまねく十方の世界を照し念佛の衆生を攝取して捨てず」とあり。攝取不捨とは殊に他力の敎の上で甚だ深き意義を有す。御慈悲を頂くに人生問題の方からと信仰問題よりするとあれど人生問題の方より片附くことが肝心なり。人生の問題は種々あれど人間は何かでいきつく運命を持つて居る、そして仕て見樣が無くなる。吾々學問であるとか修養であるとか出來得ることは凡てやるが結局窮まつてしまふ。そして人生は凡てそらごとたはごとであると云ふのが人生問題の要點である。處が他力の敎とはどう云ふことか、斯く人生は凡て力無くまことてない。そのまことてなき人生の凡てに對しそれを哀れむと云ふ光がある。是が佛である。處てそう云ふ有難い事を聞いたら有難いと感じられ相なものじやと思ふのである。然し淺間しい吾々が信仰が穫られないなどゝ言ふのは未だ調子づいた事である。佛の惠に對し喜ぶのだとか信ずるのだとか言ふ豫想を以て向つて居るからいかぬ。信仰を得樣と云ふ考が間違つて居るなら人生問題同樣行きづまる。然るに如何なる障りにも打ち勝ちて不實なれば不實なるだけ遁瀨無く哀れみ給ふが如來のお慈悲である。吾々が腹を立てたり、欲を起す。その狂亂の有樣が人間の性分であると察しをして下さるが親の心である。斯るお誠を聞かせて貰へば此のお慈悲を頂く一念に如何なる者も安心させて頂けるのである。そうして信仰の一念に於て明かに如來の光の中にをさめ入れられる攝取不捨である。其後常に喜びづめてはなくもお慈悲の光から逃げることが出來ぬ攝取不捨と云ふことを事實的に言ふと信後も一時は色々な事が出來

大谷大學圖書館 22475

て來るがきつとまたお慈悲の處に歸つて來る。これが親鸞聖人の腹である。攝取不捨の故に正定聚に入るが故に必ず滅度に至る。云々。

十月十七日。　『信順』信仰上適切な言葉である。信巻序に諸佛如來の眞説に信順しとあり。順即ちしたがふと云ふ意味が世間で從順など云ふのなれば即ちこうせよあーせよと言ふ教なれば吾々は仲々出來ない。去ればとて新な土臺、新生命を開いて進むと云ふことも出來ない。人の求むる思想は此の二者何れかである。斯る實際上の問題に接觸して眞面目に苦しむのである。そうして結局人生には光が無くなる。そうすると此處に一つの新しき事が起つて來ねばならぬ。即ち他力である、これは動くことの出來ぬ者に對し向ふから哀れんで下さるのであつて、こちらから眺めた他力ではない。聖人は廻向利益他の眞實心なりと仰せらる、こちらこそ手も足も出ぬ處に他より大慈大悲の大なる力を以てお見捨てなく哀れみ給ふを聞くなと如何に惱み多き者も如來のお誠が心に徹到してそのお誠を頂く心の現はれ來るのが信ずるのである。御言葉のまゝに有難く頂けるのである。是が信順である。法然上人が散善義の順彼佛願故の文字を見て、佛が既に願を立てゝてある。今日迄て戒を守つて助かろうとしたのが間違ひてあると氣附いて念佛一つを頂いたのも是てある。親鸞聖人と他の弟子との區別も此の信順にある。云々

十月二十四日。　『信知』と題せられたりしも筆者止む無き事あり、登聽し能はざりき。

十月三十一日。　「人生唯一の力」先生は會津に五日間傳道せられて歸る。吾々が普通善惡を言ふ時には人生の上の善惡てゐる。凡夫の上の善ほほんとのものでなく僞となれば消えて終ふ。眞面目に考へる人てあるなれば始めは必ず公明正大獨立獨行の積りてある。然るにそれは理想てあつて僞となると其の理想が消え人に認められなければ滿足出來ぬと云ふことが暴露して來て、即ち必ずしも外界の問題てないが名利心が無い積りてあつたのが善く言はれなければ滿足出來ぬ事になつたのが問題てある。どんなに眞面目にやつても人生がどうしても食ひ足りない。人生は愈駄目てある。どうしても滿足出來ぬ。問題は一時の苦しみてなく人生何もかも當てにならぬ事になつた時サテ何が當てになるかと云ふ問題が見へて來たのてある然らばどうして解決が出來るか。人が如來樣の有難い事は分るが信ぜられないと云ふがそれは有難いのが分つて居るのてない。如來の造る瀬ない思召を聞かねばならぬ。佛は汝がそれほどやつても出來ないと云ふ事が哀れだと思召し下さるのてある。苦しんだ人なら直ぐ分る。出來ないて苦しむものな哀れと思召すお心を聞けば苦しむ心が消えて、アヽ有難い南無阿彌陀佛を頂くのてある。人生唯絶對のお惠みを頂くことのみが安心の出來る道てある。そのお惠みに安心したのが唯一の力てあつて廣大なお慈悲一つて如何なる事てもさせて頂けるのてある。云々。

十一月七日。　「如來は何ぞや」思ひ切つた題てあるが信仰上最初の問題てあり亦最後の問題てある。信仰とは佛がよく分つた事てある。誰でも如來は何う云ふ意味かな先き知つたら信ぜられ樣と思ふが此考が間違へてある。如來とは罪深きものを飽くまでお見捨て無さのが佛てあるから淺間しい自分に對する御慈悲を頂くことが信心てある。即ち如來樣は悪しきものを哀れんで下さると云ふ事は理窟や道理て知ることてなくお慈悲を頂いて分るのてある。然るに自分は未だ病氣本服しやうと思つて居る如く、どうかなると思つて居る間はお慈悲が頂けない。こう云ふ時には可愛相なれど遠慮なくお前の病氣は到底助からぬのぢやと言ひ放つ。到底助からぬ者てあることが分つて來ると全く駄目なものを哀れんで下さるお慈悲が心に頂けて始めて安心出來るのてある。親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとのおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり」との仰せてある。助からぬものを佛のみが見捨てないとの仰せを聞いて見れば唯信ずる外はない。法然上人の仰せて言ふと南無阿彌陀佛は凡ての事の出來ぬ助からぬ者を見捨てんと云ふが念佛てある。何事も出來ぬ者を助け給ふ思召が南無阿彌陀佛てある。云々。

求道學舍日曜講話　（聽講甲記）

十一月一日。　雨。戶外秋雨蕭條たり。「一切の慈父母」と題せらる。一切といふ語は耳慣れて居ゐ故何氣なく思へど、聖人が此語を御用ひなつたのには實に深き意義が籠つて居るのてある。先づ正信偈には「一切善惡凡夫人」とあり、其外此語を用ひてある處は何れも善惡をこめて仰せらるゝのてある。即ち佛の慈悲は善惡一切を憐み給ふことを御示し下された。換言すれば、善いといふ事がお慈悲に對しては何の足しにもならず、又如何なる惡と雖も少しも妨げにならぬといふのてある。一體吾等の平生の考へ方はたゞ物事に對してこれは善いあれは惡いと價値をきめる事ばかりして居ゐやうてある。そこて信仰の事までも矢張り此道德的範疇の中に入れて、自分の信仰は之れて善いのかしらん、惡いのかしらんなどいふ人がある。そこへ目を着けて居るから何時迄も得られぬのてある。更に切り込んていへば、「善も要に非ず、惡も恐なし」の御言を頂くにも、惡くても善いのてあるなどゝ考ふるに至るのてある。しかるに吾々の善し惡しといふことは、實は空言に過ぎぬ、同じ事柄ても或は善くも見え、惡くも見える。それと同樣で吾々が日常自身の善惡を氣にして居るのも、よく考へて見れば、眞實自分がよしわろしといふことてはなく、寧ろ自分の行爲を人に善く思はれたい、惡く思はるゝはいやてあると、其事ばかりを氣にして居るやうてある。そこて佛に對しても矢張りこの考へて向ふて居る。それならば眞實お慈悲を頂く要點はどうかといふに、あたり前ならば善きもの丶はよくせられ、惡しきものは卸けらるゝならひなるに、あなた御一佛のみはその惡しき處をあくまで哀まぜ給ひて、お見捨て下さらぬのてある。然るに吾々の方ては、いやそうは承はりても、このやうに惡うてはと悖ひの心が起るのてあるが、すると佛はその悖ひ心、おころも承知てあるそこを不便に思ふのてあると仰せ下さるゝので、いかに剛肖なる私共も、遂にお慈悲に頭が下り、この惡き私をかように迄仰せ下さるか、實に有難やと安心させて頂くのてある。（已下次號）

近角常觀編著書目

人生と信仰　五版　定價卅錢　郵税四錢　袖珍美本

親鸞聖人の信仰　二版　定價七十錢　郵税八錢

頭冠 **執持鈔**　新版　定價三錢　郵税六冊迄二錢　施本用小冊子

信仰之餘瀝要略　三版　定價五錢　税三冊迄二錢　施本用小冊子

◎施本用小冊子は部數に應じ充分割引します

當所は何書にても御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申込所　東京市本郷區森川町一　振替東京一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回十日發行とす
一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一　郵劵代用の節は五厘切手にて一割增の事
一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一　本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢

郵税一冊に付五厘

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

大正三年十二月十三日印刷
大正三年十二月十五日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力

發行所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

大賣捌所
東京市神田區　東京堂
同　京橋區　北隆館
大阪市南區　徳永趣西文庫

前號要目

◎如來とは何ぞや　求道

◎『敎行信證』信卷（菩提心釋より）　講義　近角常觀

第五席　願成就釋

一、願成就文　二、十八願は連絡の願　三、佛敎と他敎との根本的相違點　四、本願三心の意義　五、惡いまゝでもなく、善くするのでもない　六、一念の味ひ　七、辨圓が悔悟の一念　八、姨捨山の譬喩　九、山陽の逸事　一〇、親が最後の一言　一一、一念の時剋につきて　一二、聞其名號　一三、即得往系

◎歎異鈔　第十三章（承前）　近角常觀

◎知り拔いて居るから可哀相てとの思召が　告白　增田八重子

◎信仰を求むる方式をのみ考致居候おろかさ　講話　行村吉之助

◎超絕の力　近角常觀

◎求道講話概況　時報

求道第十一卷第八號　大正三年十二月十五日發行（每月一回十日發行）　明治四十五年二月十五日第三種郵便物認可